

放送大学のサークル活動を通じた地域貢献：生涯学習から学習コミュニティ形成へ

著者	河合 明宣, 吉田 瑞樹, 川島 英昭
雑誌名	放送大学研究年報
巻	37
ページ	53-73
発行年	2020-03-25
URL	http://id.nii.ac.jp/1146/00008612/

放送大学のサークル活動を通じた地域貢献： 生涯学習から学習コミュニティ形成へ

河合明宣¹⁾・吉田瑞樹²⁾・川島英昭³⁾

Social Contribution of the OIJ to Local Communities : Learning Community as an Expansion of Circle Activities

Akinobu KAWAI, Mizuki YOSHIDA, Hideaki KAWASHIMA

要旨

2011年6月に発足した第6期中央教育審議会生涯学習分科会では、「生涯学習社会の構築」について審議し、その「議論の整理」に放送大学は、「社会人の学び直しの機会として時間的・空間的制約がなく学ぶことのできる」大学等」と明記された。これを背景に、2013年に本学に発足した地域貢献研究会は1年間の議論を以下のように要約した。

「放送大学が従来より行ってきた教育事業を通して、教育や学びを通じた①地域人材の育成、及び②地域の活性化を成し遂げるといった2つの方向性こそが本学の目指すべき課題だと考えられる。」。②が「地域貢献の実践部分」であり、各学習センターの取り組みそのもので、学生は既に社会や地域で活躍している社会人層が大半を占める多くの学生が既に実践している。この本学の特徴を強化し、学びを通して地域リーダーまであと一歩の学生の背中を押し、地域貢献への参加と結びつけることが重要となってくる（同プロジェクト報告）。

本稿は、前稿（河合他）で明らかにしたサークル活動を通しての社会貢献活動への広がりを中心に、群馬と埼玉学習センター所属サークルの個別サークルへのインタビューにより、学習センターがサークル活動を地域コミュニティにおける「地域貢献の実践」に結び付けるプロセスを明らかにする。

ABSTRACT

OIJ provides opportunities for students from various background to study at their own place without leaving their own offices or homes, and aims to be a place where students can obtain a degree for general education or advanced studies.

From the lifelong-learning point of view, almost all students of OIJ live at their own houses and maintain neighborhood relationship in their communities. All students belong to Study Centers (SC) where face to face class sessions and other educational facilities are provided. SC becomes venues for students to hold extracurricular activities and friendly exchanges in the form of circle activities. OIJ has 50 SC in each prefecture, which locate 7 Satellite Spaces and 64 Audio visual Rooms for giving easier access to OIJ archives.

Based on the previous study (Kawai et al.), this aims to explore how students find the area of contribution to society or local communities.

はじめに

学習センターにおけるサークル活動はインターネットを含むコミュニケーションを通して学習センター外で地域貢献活動を行っていることを明らかにした（河

合・吉田・川島：2018）。ネットワークがいかに形成されるかについて、群馬学習センター（以下群馬SC）のサークル「生物研究会」の10年誌およびインタビューを通してセンター外で多くの繋がりを持っていることが分かった。さらに「生物研究会」のネットワークは、いくつものノード（node）を持っているという

¹⁾ 放送大学特任教授（「社会と産業」コース）

²⁾ 本学修士修了生

³⁾ 本学修士修了生、本学TA

特色がある。

本稿では、ネットワークの繋がりの中に形成されるノードの性質、その紐帯の実態をインタビューによって把握する。前稿でアクターと呼んだのがその紐帯の実態である。生物研究会がいくつかのノードを持つにいたった背景を考察する。

1. 放送大学が提供する生涯学習環境

1) 放送大学の施設と組織

2013年に策定された本学の地域貢献事業推進は、本学の強みである以下の3点を活かしていくことであるとされる。即ち、1) 全国に展開する知の拠点（50か所の学習センター、7か所のサテライトスペース）。2) 即戦力のある人材（約9万余人の社会人学生とそれをサポートする880人以上の学習センター教職員）。3) 強力な教育情報システム（全国に展開する放送授業・面接授業・公開講演会、インターネットなど）である。

放送授業と面接授業とが教育の中心で、面接授業、全国一律の単位認定試験会場及び学習拠点である全国に展開する各学習センターのもと約9万余人の社会人学生が学んでいる。地域学習センターが地域貢献活動の推進の現場である（河合他 2018）。

高等教育レベルでの生涯学習機関である放送大学は、50の学習センターを教育環境の違いを考慮して7つのブロックに分けている。大学と各学習センター間にあるメゾレベルの制度である。2学期制の各学期発行の面接授業案内はブロック単位で編集されている。近年、北海道・東北ブロック連携面接授業「共通テーマ 芸術に親しむ 2019年度」のようなブロック連携面接授業が開講され、学生以外の住民にも参加の機会が与えられている。

本学執行部・事務局とブロック内全センター長・事務長とのブロック会議が開催されている。会場はブロック内各センターの持ち回りとなっている。また、同窓会は全国組織である連合会がある。学習センター別の同窓会活動の支援、連絡調整を図り、学位授与式後の祝賀会を大学と共催し、会の司会進行を務める。メゾレベルではブロック同窓会交流会が開催されて、記念講演会、情報交換会、史跡見学、懇親会などを通して交流が行われている⁴⁾。

- 1) 全国レベル：強力な教育情報システム（全国に展開する放送授業・面接授業・公開講演会など、インターネットWAKABAシステム）、
- 2) メゾレベル：北海道・東北、北関東、南関東、北陸・東海、近畿、中国・四国、九州・沖縄ブロックの7つのブロック、
- 3) 学習センター：face to faceによる面接授業及び全国一律の単位認定試験の実施、学習の場であ

り学習拠点である。同時に地域コミュニティと繋がるインターフェイス機能を果たしている（図3、後出）。

学習センターが学習とサークル活動の場を提供しているが、学生間ではブロック毎の交流が行われている。面接授業案内がブロック毎に作成され、所属するセンター開催の面接授業科目に拘束されず、選択肢を豊富にする。異なったセンター所属の学生が、関心のあるテーマを選択した面接授業で他センターの学生との交流も進めている。特に、自然、地理、歴史/文化などのテーマ別で開催される屋外面接授業は、地域の様々な課題認識とその解決策の探求を促す契機となる。2日間共に行動し、会話する機会が室内授業に比べて格段に多く、既修科目の情報交換に加え、他地域での社会貢献活動経験を知る契機にもなる。

立田(26)は、「知識基盤社会では、生涯学習が重要になる。」という。放送大学の地上施設と人的組織を含めたインフラ全体（生涯学習システム）は、「知識基盤社会」の生涯学習推進機関と捉えられる。「生涯学習が個人、組織、社会全体で行われるようになる。（図6、後出）に示したように、今後の社会が、学習する人、学習する組織、そして社会そのものがそうした人や組織によって構成されていく時、そうした人や組織を支援できる学習環境が重要になってくる」とする。さらに生涯学習推進の観点から立田は、特定の地域において、ネットワークを強力な武器とする学習コミュニティ成長の重要性を指摘する。

「各地域が作り出す人間関係や組織間のネットワークは、それ自体が重要な公共の資源であり、公共の財産と見ることができる。私たちは、自分たちの学習環境を変えていくためにも、こうしたネットワークの観点から、ネットワークをどう育てていくかを考え、行動していく必要がある。」（立田：206-7）。

2) サークル活動の学習グループ

この観点から前稿のサークル活動のネットワークの広がりにもみられるノードの性質を見きわめる必要がある。群馬SC及び埼玉学習センター（以下埼玉SC）で活動する個々のサークルに対して、主にインタビューを基にして考察する。

河合他(2018)で群馬SCのサークル「生物研究会」の10年間の活動記録⁵⁾と関係者へのインタビューをもとにそのネットワーク分析を行った。ネットワーク全体のソシオグラム（図1、後出）と群馬SC「生物研究会」の行事分析表（前稿表3-5参照）を得て、下記表1に整理した。前稿では、「アクター」がネットワークの核のノードとなり、ネットワークを周縁に拡張し、前稿の表3-5に見られるように放送大学のフォーマルな学習カリキュラムの外側にもう一つのカリキュラムを発生させていることが分かった。また、ネッ

⁴⁾ 放送大学中国四国ブロック学習センター（2017）

⁵⁾ 生物研究会『創立十周年記念誌』放送大学群馬学習センター、平成28年4月

表1 放送大学の学びの種類と場所の一覧

階層	学習の種類と場所		有償・無償	放送大学教員関与・施設使用有無	フォーマル・インフォーマル、受動・能動学習、個人・グループ学習
1	放送授業	どこでも	有償	有償教員、施設内	フォーマル、受動的、個人
2	面接授業	SC内	有償	有償教員、施設内	フォーマル、受動的、個人
3	野外面接授業	SC外	有償	有償教員、施設外	フォーマル、受動的、個人
4	面接授業（修士論文・卒業研究）	SC内外	有償	有償教員、施設内外	フォーマル、能動的、個人
5	サークル活動	SC内	無償（会費？）	教員は無償の参加、施設内	インフォーマル、能動的、グループ
6	サークル活動 SC内活動の延長	地域社会	無償（会費？）	教員は無償の参加、施設外	インフォーマル、能動的、グループ
7	サークル活動 (SC外) 地域（貢献）活動	地域社会	無償（会費？）、経費稼ぐ必要？	教員は無償の参加、施設外	インフォーマル、能動的、グループ、実践活動
8	サークル活動 (SC外) 営利・非営利組織・団体等の活動	地域社会	経費稼ぐ必要	教員無償・有償参加、施設外	インフォーマル、能動的、グループ、実践活動

出所：（河合他 2018）表3-6を転記。

トワーク周縁での行事は表1の階層7及び階層8に見られるように地域貢献に繋がって行く。なお、表1で示す放送大学の学習階層において、学びが4つの転換点で変容していくことを把握した。それは、1) 受動的学習から能動的学習へ、2) フォーマルな学習からインフォーマルな学習へ、3) 個人学習からグループ学習へ、そして4) 学習から実践活動への変容である。

1.2. 残された2つの課題

- 表1の階層の分類は、群馬SCの「生物研究会」を対象として整理したもののだが、放送大学のサークル活動に一般化できるのかどうか確認できていない。本稿で埼玉SCの事例を考察する。
- 「生物研究会」のネットワーク分析とネットワーク内の人材から生み出された203回の行事の分析により、参加者が地域活動や地域貢献活動に参加、体験、交流していることが確認できた。しかし、地域貢献活動に参加する為の「仕組み」や「システム」（仮に「プラットフォーム」と呼ぶ）や「出口」、地域貢献や社会貢献への「入口」がどのような形で存在しているのか否か、分析できていない。これらが本稿の課題である。
- 「生物研究会」を経由して地域貢献活動に参加する場合、「生物研究会」正式メンバーや、「サポーター」と呼ばれる「生物研究会」の共鳴者が「グループ」になり行事に参加している。
本稿では、この「グループ」学習に着目し、「グループ」化＝「人々の集合」＝「コミュニティ」形成の背景と特色を事例から明らかにしたい。

2. 放送大学の社会貢献とは何か —群馬SCの事例

2.1. 群馬SC「生物研究会」の学習階層における「コミュニティ」の整理

表1「放送大学の学びの種類と場所の一覧」を広井（2009）と黒川（2006）によるコミュニティに関する

論点を引用し整理する。

広井は、『コミュニティを問いなおす』で、「コミュニティ」について以下に述べる。

- コミュニティ＝人間がそれに対して何らかの帰属意識をもち、かつその構成メンバーの間に一定の連帯ないし相互扶助（支え合い）の意識が働いているような集団（広井 11）。
- 「コミュニティ」という時、少なくとも次の三つの点は区別して考えることが重要と思われる。すなわちそれらは、①「生産のコミュニティ」と「生活のコミュニティ」、②「農村型コミュニティ」と「都市型コミュニティ」、③「空間のコミュニティ（地域コミュニティ）」と「時間コミュニティ（テーマコミュニティ）」という三つの視点である（広井 11-12）。
- 現在の日本社会において、様々なNPOや協同組合、「社会起業家」等々の多様な活動・事業や実践に見られるように、「新しいコミュニティ」づくりに向けた多くの試みが百花繚乱のように生成していることは言うまでもない。こうした「ミッション（使命）」志向型（あるいは「テーマ型」ないし「時間コミュニティ」とも呼ばれる）コミュニティは、伝統的な地域コミュニティとどのような形でクロスし、また今後の展望が開かれていくのだろうか（広井 21）。
- 人間の社会は最初から個体ないし個人が「社会（集団全体）」に結びつくのではなく、その間に中間的な集団を持つ。したがって、個体の側から見れば、それはその中間的な集団「内部」の関係と、「外部」の社会との関係という、二つの基本的な関係性を持つ（広井 24）。

黒川は、『都市革命』で「時間コミュニティ」を以下のように説明している。

- また個と全体の対立は、理想的には個の中に全体

の意志が反映されているという自立したホロニクな秩序、あるいはフラクタルな構造の実現によって解決されるだろうが、その途上として、個でも全体でもない中間領域、例えば個人と社会の間に存在する職場、ショッピングモール、学校、スポーツ競技場、コミュニティ、同窓会、同好会、宗教団体、NPOグループなどが大きな役割を果たすのではないかと（黒川 29）。

- 2) 人間は自分の家を生活の基地にしながら、そこを起点に次々とオアシスを渡り歩いて、一日二十四時間を過ごしていく。（中略）私は都市の中に形成されるこのようなコミュニティを、従来の「地域コミュニティ」に対して、「時間コミュニティ」あるいは「テンポラリーコミュニティ」と呼んでいる。これはすなわち二十四時間の時間の中で成立するコミュニティである。コミュニティは本来、一定の場の中で成立するものであるが、場の中で成立するコミュニティと、時間の中で成立するコミュニティとが二重のレイヤーとなっている（黒川 69）。
- 3) 現代は地域社会の連帯意識に根ざした「地域コミュニティ」の時代が終わり、職場コミュニティ、学校コミュニティ、同好会コミュニティ、同窓会コミュニティ等々、住んでいる場所は共通ではないが一日のある時間、ひと月のある一日を共有する流動的なコミュニティが必要である。そしてこのような無数のテンポラリーなコミュニティが都市空間に共有の場として組み込まれることが必要である（黒川 98）。

広井の論点3)は、「ミッション（使命）」志向型コミュニティ、或いは「テーマ型」コミュニティは、NPO法人などを含む「新しいコミュニティ」である

と位置づける。

黒川の論点もこれに近いものだと考えられる。黒川は「時間コミュニティ」の例示としては、同好会、同窓会、NPOなどをあげる。人々が集合し参加する「場所」を含め「中間領域」や「共有空間」と呼んでいる。「都市空間に共有の場」が組み込まれる必要性があるとする。広井、黒川は、「コミュニティ」は「中間的な集団」なり「中間領域」に存在している点で一致した見方をしている。

広井、黒川の論点を借りれば、本稿で考察しようとしている放送大学、同窓会、同好会（サークル）、サークルのネットワーク、NPO法人などは、いずれも「時間コミュニティ」であり、且つ、「中間的集団」や「中間領域」という定義づけが出来る。ミッション（使命）やテーマをテンポラリーに追い求める集団は「時間コミュニティ」を形成すると考えられる。

この論点に基づき、広井が言う「ミッション（使命）」志向型、「テーマ型」と黒川が言う「テンポラリー」に人々が集団となる「コミュニティ」を「時間コミュニティ」と捉えて更に整理を進める。

放送大学は、主に放送やインターネットを媒介して教育や学習を行う機関である。バーチャル空間で教育、学習が行われる他、face to faceで行う学習センターでの面接授業や卒業研究、修士ゼミがある。表1「放送大学の学びの種類と場所」を、「場所」から「人々」に着目し、学習階層がどのような「コミュニティ」を形成しているのか整理したものが表2である。前稿の「表1 群馬SC「生物研究会」行事分析表（河合他 56）」に整理したように、「生物研究会」の各行事は、「テーマ」をもって、「テンポラリー」に参加したものである。即ち、各行事において「時間コミュニティ」が形成されたと考えられる。

表2 「放送大学の学びの種類と場所の一覧」をコミュニティに置き換えた表

階層	学習の種類と場所		コミュニティの種類	紐帯強弱		フォーマル/インフォーマル (放送大学との関係性)
				参加時	非参加時	
1	放送授業（放送大学）	どこでも	時間コミュニティ バーチャルコミュニティ	弱い	弱い	フォーマル
2	面接授業（放送大学）	SC内	時間コミュニティ	弱い	弱い	フォーマル
3	野外面接授業（放送大学）	SC外	時間コミュニティ	弱い	弱い	フォーマル
4	修士論文・卒業研究 (放送大学)	SC内外	時間コミュニティ	強い	弱い	フォーマル
5	サークル活動・同窓会	SC内	時間コミュニティ	強い	弱い	インフォーマル（セミフォーマル）
	サークル活動外部ネットワーク	SC外	バーチャルコミュニティ	弱い	弱い	インフォーマル
6	サークル活動 (SC外)	SC内活動の延長	地域コミュニティ	強い	弱い	インフォーマル
7		地域（貢献）活動	地域コミュニティ	強い	弱い	インフォーマル
8		営利・非営利組織・ 団体等の活動	地域コミュニティ	時間コミュニティ	強い	弱い

出所：吉田作成

放送及びインターネットの授業が行われ、「場所」を選ばないのが、「時間コミュニティ」と「バーチャルコミュニティ」の階層1である。階層2から階層5のサークル活動・同窓会までは「時間コミュニティ」、サークル活動外部ネットワークは「バーチャルコミュニティ」といえる。階層6から階層8は「時間コミュニティ」である。階層別にそれぞれの学習レベルに参加する学生の紐帯の強弱は、face to faceでの集合時には強い紐帯、それ以外は弱い紐帯だと考えられる。例えば、修士ゼミ参加時は強い紐帯であるが、修士ゼミのネットワーク全体は弱い紐帯だと考えられる。放送大学との関係性でフォーマルかインフォーマルなコミュニティかどうかという視点では、階層1から階層4までは、フォーマルなコミュニティ、階層5のサークル活動・同窓会が学習センター「公認」組織だが、活動の自主性を考慮すれば、セミフォーマル或いはインフォーマルなコミュニティと考えられる。階層5のサークル活動外部ネットワークから階層8までは、全て放送大学の外部で行う能動的かつ自主的活動であり、必然的にインフォーマルなコミュニティになる。

2.2. 「生物研究会」2次ノード：アクター藤生幹雄氏とアクター川島秀男氏の活動事例

1) 藤生氏と川島氏の「生物研究会」ネットワークの位置

藤生氏と川島氏の「生物研究会」ネットワーク図(図1)での位置は、藤生氏が、生物研究会の点線円内のノードAQ、川島氏が「生物研究会」点線円から一時の方向にあるノードOである。川島氏が埼玉県鴻巣市で特定非営利活動法人(以下NPO法人)鴻巣こうのとりを育む会で活動を行っているのに対し、藤生氏は、群馬県伊勢崎市で自治会・ボランティア団体などで「地域活性化(まちおこし)」を目指して活動中である。

2) 藤生幹雄氏の活動状況

藤生幹雄氏は群馬SC「生物研究会」のネットワーク図ではAQで示す「生物研究会」会員である。その他、群馬SCのサークル「若宮クラブ」顧問も務める。藤生氏の修士論文では、「居住する隣組(行政の最小単位)、自治体(町)、地区(旧赤堀町)」を主体に研究を進めている。修士論文から自身が居住する伊勢崎市での活動状況が読み取れる。藤生氏の活動は、「生物研究会」のネットワーク2次ノードをつないだ先に

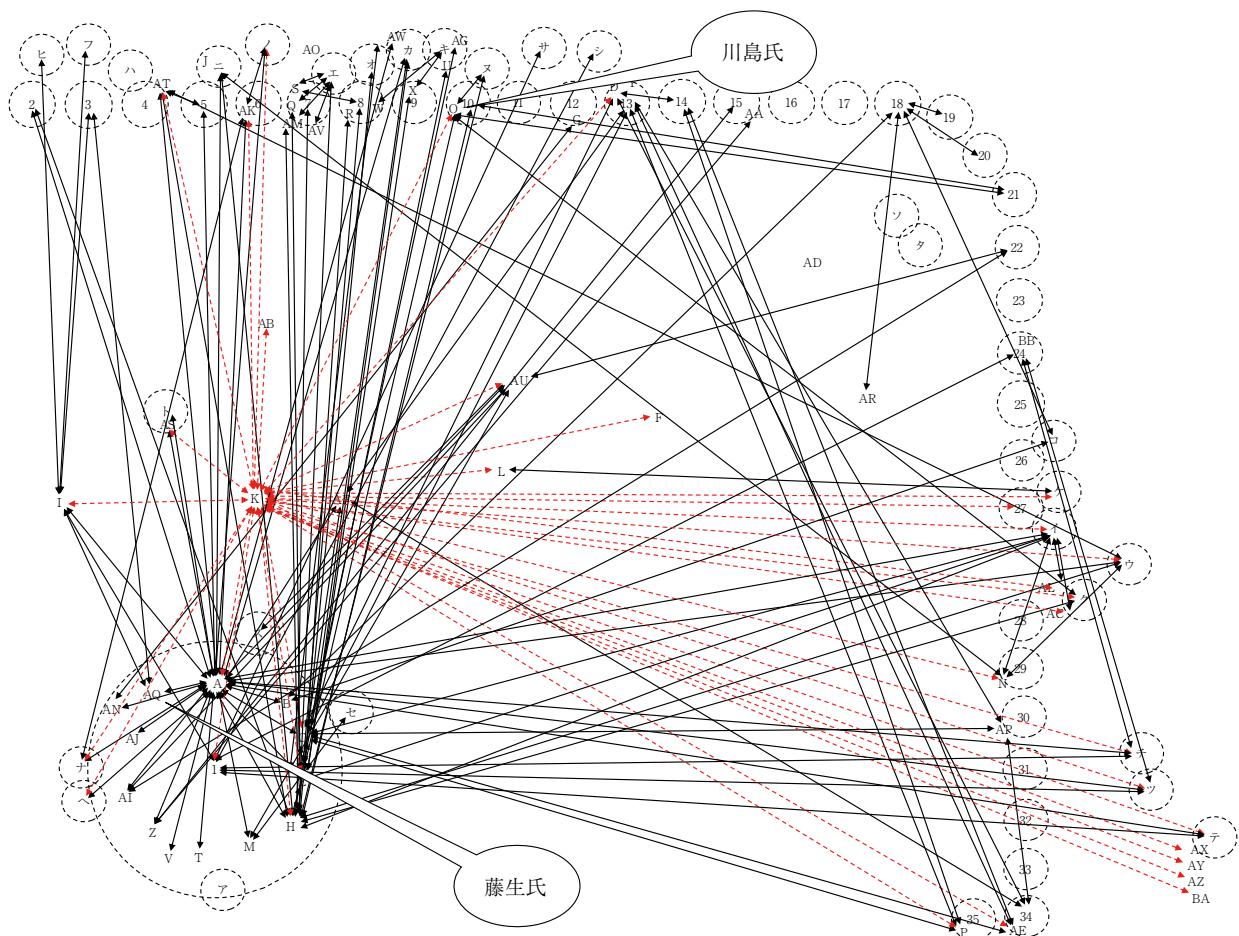


図1 「生物研究会」ネットワーク上の藤生幹雄氏と川島秀男氏の位置
出所：河合他(53)の図3-6に吉田加筆作成

表3 藤生幹雄氏の活動分析表

藤生氏活動	①放送大学&サークル活動「生物研究会」「若宮クラブ」	時間コミュニティ	②自治会活動	直接	地域コミュニティ
			③地域啓発活動（伊勢崎市赤城南小運営協議会委員）	中間的集団	時間コミュニティ
			④伊勢崎市議会議員	中間的集団	時間コミュニティ
			⑤伊勢崎市市民議21	中間的集団	時間コミュニティ
			⑥伊勢崎市生涯学習推進協議会委員	中間的集団	時間コミュニティ
			⑦けやき俳句会会員（公民館サークル）	中間的集団	時間コミュニティ
			⑧川柳「サークル会」会員	中間的集団	時間コミュニティ
			⑨「小菊の里」会員	中間的集団	時間コミュニティ
			⑩「歴史探訪の会」会員（神社・仏閣巡り、郷土史研究）	中間的集団	時間コミュニティ
			⑪伊勢崎まちガイドボランティア活動	中間的集団	時間コミュニティ
			⑫パソコン勉強会（市場町二丁目IT研究会（PC）会員	中間的集団	時間コミュニティ
			⑬卓球を通じた交流活動（地域活性化） 卓球三段（日本卓球協会公認・前橋中央クラブ所属）	中間的集団	時間コミュニティ
			⑭グランドゴルフ「遊友会」（県立ふれあいスポーツプラザボランティア）	中間的集団	時間コミュニティ
			⑮群馬県スポーツ振興事業団 登録指導員	中間的集団	時間コミュニティ
			⑯上毛新聞への投稿	直接	地域コミュニティ

出所：吉田作成

あるのではなく、藤生氏自身が伊勢崎市の旧住民の立場から以下11種類の「コミュニティ」に働きかけを行っている。

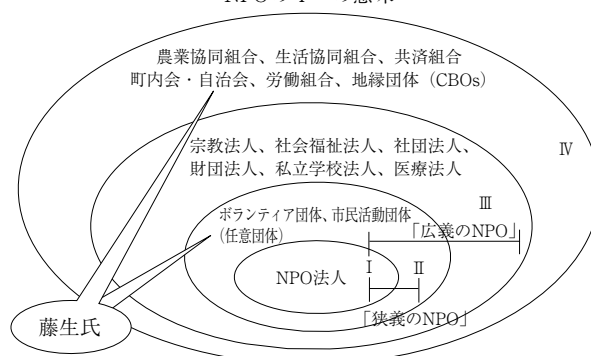
- 1) 放送大学サークル活動「生物研究会」「若宮クラブ⁶⁾」
- 2) 自治会活動
- 3) 伊勢崎まちガイドボランティア活動
- 4) 地域啓発活動
- 5) 卓球を通じた交流活動（地域活性化）
- 6) パソコン勉強会
- 7) 伊勢崎市市民議21
- 8) けやき俳句会（公民館サークル）
- 9) グランドゴルフ「遊友会」
- 10) 伊勢崎市議会議員
- 11) 上毛新聞への投稿

このリストにインタビュー時⁷⁾に入手した名刺などから最新情報を加え表3に整理した。藤生氏が修士論文を書きあげた2010年度から、インタビューを実施した2019年6月までの活動を列挙したものであるが、この中には、市議会議員活動のように活動を終了したものも含まれる。そのうえで、活動分野は16に増える。

活動分野は放送大学&サークル活動を①とし、伊勢崎市内での活動を②から⑯とした。放送大学を起点とし、15種類のコミュニティ（地域、時間）に対して働きかけを行っている。活動分野を大きく分類すると、②～⑥が地域に関する貢献活動、⑦～⑫が趣味や郷土の歴史文化に関する交流やボランティア活動（⑫はその資料を整理するスキル）、⑬～⑮がスポーツ振興関係、⑯が地域に関する投稿、である。

①の放送大学&SC・サークル活動は②～⑯の活動

NPOの4つの意味



注：早瀬昇・松原明「NPOがわかるQ&A」岩波ブックレット、2004年、10頁

図2 NPOの分類

出所：河合・大橋（21）に藤生氏の活動位置を吉田加筆

を回す「メタ学習」の位置にある様にイメージできるが、生涯学び続けようという意識が明確に読みとれるからである。なお、「コミュニティ」には、「中間的集団」、「直接」働きかけるものを区別した。放送大学及びサークル活動（中間的集団）＝「時間コミュニティ」からスタートする藤生氏の活動は、15種類に分かれていくが、そのうちの13種類の活動は「中間的集団」を経由して「地域」の「時間（テーマ）コミュニティ」での活動である。

藤生氏の地域活動の立ち位置はどこにあるのか確認する。②～⑥は、②の自治会活動に代表されるように、公益活動ではなく共益活動である。⑦～⑫は⑪が示すようボランティア活動である。「NPOの4つの意味」（早瀬・松原 2004）に河合・大橋（21）が加筆した図2に、藤生氏の立ち位置を示す。自治会活動に代

⁶⁾ 群馬SCの公認サークル活動、いくつもの分科会を持ち、群馬SCの複数のサークルと共催企画も行う。

⁷⁾ 2019年6月8日 放送大学群馬学習センターで実施。

表4 川島秀男氏の活動分析表

川島氏活動	① NPO 法人鴻巣こうのとりを育む会	時間コミュニティ	特定非営利活動 ②環境の保全を図る活動 ③社会教育の推進を図る活動 ④まちづくりの推進を図る活動 ⑤子どもの健全育成を図る活動	中間的集団	地域コミュニティ 時間コミュニティ
			法人目的達成のための事業 ⑥ビオトープ保全事業 ⑦コウノトリに関する講演会・イベント開催事業 ⑧啓蒙活動及び環境教育事業 ⑨コウノトリ飼育調査環境事業 ⑩観察会の主催、協力、後援事業	中間的集団	地域コミュニティ 時間コミュニティ
			⑪コウノトリの追っかけ（野田市がGPS管理）	中間的集団	時間コミュニティ
			⑫全国放送大学SCにコウノトリ追っかけネットワーク展開	中間的集団	時間コミュニティ
			⑬佐渡のトキ関係者との連携	中間的集団	時間コミュニティ
			⑭コウノトリの放鳥を実施中の豊岡市との連携	中間的集団	時間コミュニティ
			⑮越前市、鳴門市、雲南市、京丹後市などコウノトリ関係市の情報収集	中間的集団	時間コミュニティ
			⑯埼玉大学大学院理工学研究科博士後期課程	中間的集団	時間コミュニティ

出所：吉田作成

表される空間のコミュニティ（地域コミュニティ）に強くコミットしながら、テーマ型ないし「時間コミュニティ」と呼ぶ、非営利で社会貢献活動を目的とする「有志型NPO」の活動も重視していることが分かる。

伊勢崎市議会議員は2期8年務め現在は議員ではない。藤生氏はインタビューで、「忙しすぎる状態で、ボーッとする時間が必要。修論を書いていた時期には毎日のように群馬SCに通っていたが、現在は週に1～2回に減った。図書館で頭を休めている。」という。

藤生氏の活動は①から②、①から③へと①を起点に15の活動に分かれていく。表4が示すように①の階層を上位としているのは、①→②→①や、①→③→①のように、放送大学や「生物研究会」、「若宮クラブ」のサークル活動に戻り、地域貢献の情報をフィードバックし生涯学習を継続しているからである。

藤生修士論文発表資料の冒頭には、「地域は大地（旧住民）を新しい風（新住民）が耕す事で活性化される」といわれるとある。この一文が藤生氏の地域貢献活動を貫く精神であることが分かる。自治会活動のような「地域コミュニティ」に対する活動の他は、多くは「時間コミュニティ」での活動である。藤生氏は、伊勢崎市の旧住民として「私自身は旧に属する立場だが、考えとしては新に同調だ」（藤生 56）と述べ、新住民の気持ちに同調して「地域活性化」や「まちおこし」の活動を行っている。

藤生氏は修士論文要旨で、「地域活性化（まちおこし）の切り口をどこに求めるか。恐らくそれは数多く、住む人間の数にも匹敵するほどあるのではないかと思う。」と述べている。藤生氏の活動から、地域貢献活動を見た場合、貢献対象先は多種多様であり、対応する人材の多様性が求められるのではないかという点も想起される。言い換えれば、1人で15の「コミュニティ」に対し働きかけを行っているのである。

藤生氏が『文部科学教育通信』No.402（2016年12月26日）に投稿した「私の放送大学：学び続けて成長」から活動背景が書かれているので以下に抜粋、ポイントを整理する。

- ・スバルに勤務して省力化設備設計部門に所属し休日出勤、残業の連続の日々を過ごす
- ・放送大学の資料を繰り返し取り寄せ面接授業や単位認定試験と業務予定を突き合わせる
- ・50代半ばに群馬大学工学部機械工学科での単位修得が認められ放送大学に三年次編入
- ・放送大学入学は、かねてから願望の文系で「人間の探求」を専攻—自らの内面にたまっていたハングリーな思いを埋め尽くす学びの挑戦
- ・放送大学生の身分のまま地方選挙（伊勢崎市市議会議員）に挑戦し当選
- ・放送大学で「社会と経済」コースを卒業し、修士にチャレンジ、テーマは「地域活性化論」
- ・学生サークル仲間との課外学習、日常会話、普段取り組んでいるボランティア活動の重要性を再認識
- ・新たな挑戦を目指し自己能力の維持改革をキープ、生涯学び続ける気持ちを持つ

ここには、1) 理系から文系での学びなおし、2) 地域活性化にチャレンジ、3) 生涯学習の継続（＝学びなおしの継続）が明確に語られている。

藤生修士論文に掲載された「伊勢崎市市場町二丁目区規約（案）」の欄外に、「長い間地域住民の間、口約束、伝承、長老方の記憶にあった事項を体系的に整理、編集。この事によって住民意識の統一、問題点が顕在しあらたな進歩がはかれる。」と注記がある。この他、表3の⑭グランドゴルフ悠遊会も藤生氏が規約を起案したことが修士論文から読み取れる。伊勢崎市

市場町二丁目区規約(案)第6条(事業)の3項には、「生涯学習の推進と文化活動への協力を行う。」と提案されている。放送大学における生涯学習(学び)が地域における生涯学習(実践)と呼応するように見える。

また、表3では藤生氏が働きかけた15のコミュニティは、「地域コミュニティ」が2つ、「時間コミュニティ」が13である。つまり、藤生氏は15通りに自身の時間をより分けて地域に働きかけを行ったことになる。藤生氏は伊勢崎市赤堀地区住民であるので、そこを起点として15の「コミュニティ」に対し、自身を15の対応人材にして地域貢献を行ったともいえそうである。地元住民ならではの、驚くべき活動範囲の広さである。

藤生氏の活動は、修士論文の冒頭の、「地域は大地(旧住民)を新しい風(新住民)が耕す事で活性化される」を実現するための、規約の透明化、見える化での仕組み作りや、さらに集約すれば地域住民の様々な「交流促進」といえるのではないだろうか。

藤生氏の修士論文に放送大学の10年について述べられている。「入学した当初はひとり1人学び、黙って食事を取ることが当然と考えていた。様々の人生を経てここに在籍する人たちはどんな考えを持っているのだろうか。そして地域、生活する地元での活動はどうか。お互いが徐々に興味を拡大し、地域を見、探索、県内のハイキング、山へも出かけようと言う機運になった。地元企業の見学、介護施設訪問は学問中心になりがちな学生の立場に新鮮な体験を与え続けたと思う。このことが示唆しているのは、放送大学は「バーチャルコミュニティ」でface to faceのつながりのないものだが、学習センターにおいて好奇心や関心を示す事により、仲間ができ、仲間が「時間コミュニティ」に変容していったと考えられる。

修士論文の添付資料には、『上毛新聞』2010年4月14日付で、「藤生氏らの呼びかけで実行委員会をつくり、放送大学で学ぶ「仲間」達に参加を呼びかけ「研究成果発表会」が初めて開催された」ことがレポートされている。放送大学を卒業し、修士論文に「後半生を修士論文に書き込んだ」藤生氏の地域貢献の体験が群馬SCのサークル活動「生物研究会」や「若宮クラブ」にフィードバックされ情報共有されるサイクルが回ることは重要であろう。

先述したように、黒川は「地域コミュニティ」の時代が終わり、(中略)、一日のある時間、ひと月のある一日を共有する流動的なコミュニティが必要である。」と述べている。このことは、伊勢崎市で地域に密着した旧住民の立場で、幅広く「地域活性化(まちおこし)」を行っている藤生氏でも例外ではないことが表3から確認できる。そうであれば、旧住民ではない、地域を持たない人々や地域に密着性がない新住民が、地域貢献活動や社会貢献活動を行う場合、「テンポラリーコミュニティ」或いは「時間コミュニティ」

を介して、入っていくことが考えられるのである。

3) 川島秀男氏の活動状況

川島秀男氏の「NPO法人こうのとりを育む会」活動状況については、『NPOマネジメント』(河合・大橋 2017)に紹介されている。本稿では川島氏へのインタビュー⁸⁾から、2012年設立のNPO法人の活動を含めポイントを表4に整理する。

川島氏は、「自分の活動はインタビュー冒頭で『生物研究会』ネットワークから緑色でネットワークが広がるイメージ」と述べた。「NPO法人」定款第3条に「この法人は、コウノトリの飼育・放鳥に向け、コウノトリも生息できる水辺空間、緑地空間を広く、市民及び公共団体と協働、連携して保全と再生を図ることを目的とする。」とある。地に着いた環境整備と共に、行動先はこうのとりが飛翔する全国のこうのとりに関係地域や、佐渡のトキ関係団体など、こうのとりに関係する活動先に及んでいる。

2012年のNPO法人発足時は正会員20名程度活動を開始し、ピーク時は正会員200名に達したが現在は150名程度で落ち着いている。表4で①は川島氏活動の起点(NPO法人)、②から⑩は、まさにNPO法人の活動であり、農家など「地域のコミュニティ」や小学生・中学生などへ「時間コミュニティ」を供給し活動を進めている。⑪から⑮もこうのとりに関係する活動で「時間コミュニティ」での活動。⑯も中間的集団での活動だと考えられる。

細分化された「時間コミュニティ」活動であるが、時間の殆どをこうのとりの為に費やしていることが読みとれる。川島氏の活動は、「時間コミュニティ」の「NPO法人鴻巣こうのとりを育む会」という「中間的集団」で「地域コミュニティ」や「地域環境」に働きかけを行っていることが読み取れる。公開されている平成28年度から平成30年度のNPO法人の事業報告書の(1)特定非営利活動に関わる事業を整理し、転記したものが表5である。行事に参加した従事者のべ人数、受益者のべ人数を足しこむと、それぞれ647名(H28年度)、624名(H29年度)、613名(H30年度)のように多数である。川島氏の活動の中核は、こうのとりを育むための環境整備、広報活動、啓蒙活動、生物観察など人々の「交流」を通じて行われていることが読み取れる。

4) 藤生氏と川島氏の事例からのまとめ

表2で、生物研究会の行事が「時間コミュニティ」の中で行われていることを述べた。一方、これらの「時間コミュニティ」のテーマ別グループ学習(=実践活動)の行先は、ネットワーク内の二次ノード先であり、例えば川島氏の活動への参加などを挙げることが出来る。川島氏の活動母体はNPO法人であり、ミッションを持った活動で、やはり「時間コミュニティ」の中での活動である。また、藤生氏の事例からは、地域に密着した基盤を持った藤生氏も、旧住民や

⁸⁾ 2019年6月7日 放送大学埼玉学習センターで実施。

表5 NPO法人鴻巣こうのとりを育む会の平成28年度～30年度活動概況

定款の事業名	事業内容	実施場所	従事者の人数			受益対象者の範囲及び人数			
			H28年度	H29年度	H30年度	H28年度	H29年度	H30年度	
ビオトープ保全事業	維持管理及び安全対策を行う。	荒川河川敷内及び原馬湿地内	85名	158名	160名	関係者・小学生等	25名	15名	10名
講演会・イベント開催	コウノトリを育む水田・周辺及び原馬室湿地での生きもの観察などを実施した。	水田原馬湿地内	87名	35名	55名	関係者・農業従事者・小学生等	350名	185名	175名
啓蒙活動事業	生物外来種の駆除を実施した。	ビオトープ及び荒川河川敷	20名	28名	30名	園児及び先生・関係者	35名	107名	115名
生物観察事業	県民生き物モニタリング調査	小谷・糠田・野田市・小山市他	35名	53名	53名	関係者・小学生・保護者	10名	43名	15名
		のべ参加人数	227名	274名	298名	のべ参加人数	420名	350名	315名

出所：埼玉県NPO情報ステーション・コバトンびんHP⁹⁾より吉田作成。

表6 全国の学習センターにおけるサークルのカテゴリー分類

外国語	パソコン	スポーツ	文化・芸術	人文・社会	理工・自然	心理	複数混合系	資格系	合計
68	25	51	55	55	26	16	62	4	362

出所 放送大学ホームページ 学習センターホームページリンクより川島作成。

<https://www.ouj.ac.jp/hp/sisetu/center/hplink.html> 2019年9月30日確認

新住民の融合を図る際には「時間コミュニティ」の中で活動していることが分かった。これは立ち位置の異なる人々が共通のテーマでテンポラリーに集まることを意味しているのではないだろうか。

3. 埼玉SCにおける同窓会及びサークル活動の特色

3.1. 学習センターでの学生活動

前稿で群馬SCにおいては学生のインフォーマルで能動的な活動の基盤となるものはサークル活動、同窓会活動と考えた。本稿ではサークル、同窓会に視点を当て、埼玉SCで事例観察を行った。

サークルと同窓会のメンバー間にネットワークが形成されているのではないか。そのネットワークはどのような経過で作られたのか。そのうえでインフォーマルな活動がどのように地域貢献の取り組みを行っているのかを事例から考察する。

放送大学における学生団体は、在学生在が自主的に活動するサークルと卒業生・修了生（以下卒業生）の親睦的組織の同窓会の2つに分けられる。全国の各学習センターに登録されているサークルは、放送大学公式ホームページの各学習センターサイトにアップされて

いる。各学習センターのサイトからサークルを集めて、表6のように分類を行った¹⁰⁾。このサークルがどのような内容の活動を行っているのか。サイトの紹介欄を基に9つのカテゴリーに分類した。

サークルの特徴は、生涯学習に関連する学習やスポーツが大半¹¹⁾であった。語学、人文・社会、理工・自然、心理は、大学の授業の能動的発展¹²⁾といえる。すなわち放送大学の位置づけである生涯学習の推進をインフォーマルな活動においても体現していることが分かる。このことは、前稿で把握した表1「放送大学の学びの種類と場所の一覧」においてサークル活動（階層5）から能動的でかつインフォーマルな学習形態に転換¹³⁾することを示している。

同窓会は学習センターごとに作られているが、会員要件を在在学生まで対象とするものは14同窓会である（HPの紹介で在在学生を対象としているものに限った）。ただし放送大学には卒業後に再入学する学生も多数いることから、実態としては全国の同窓会では現役生が多数入会している。このような特徴から同窓会は放送大学への支援・協力¹⁴⁾や卒業生間の交流、研鑽のみでなく、現役生との交流、支援にかかわる事例も発生する。特にいくつかの同窓会は「学友会・同窓会」¹⁵⁾として名称から相互組織としたものも見られる。

⁹⁾ <http://www.saitamaken-npo.net/database/kyoudou/group.php?mode=form>

¹⁰⁾ 2019年9月時点で放送大学ホームページにアップされている学習センターのサークル数は362であった。

¹¹⁾ 複数混合系は2つ以上の生涯学習活動のカテゴリーを含んでいる。

¹²⁾ 各学習センターのホームページにおけるサークル紹介には面接授業の教員が講師となってサークルが作られた、面接授業の参加者がメンバーになって作られたなどの記載が多数ある。なお後述する埼玉SCにおける「健康体操研究会」「埼玉英語倶楽部」も同様である（健康体操研究会、埼玉英語倶楽部のインタビューより）。

¹³⁾ 能動的な活動には階層4（卒業研究・修士論文）においても転換している。

¹⁴⁾ 放送大学と同窓会連合会が行う、全国の卒業式・学位記授与式の支援など。

¹⁵⁾ このような事例に大阪学友会・同窓会や宮崎学友・同窓会他がある。

以上の点からサークルと同窓会の参加構成員が重なっている可能性がある。サークルと同窓会が連携した事例を見ることで放送大学のネットワークがどのように形成され、そこからどのように地域社会へと関係性をもつのかを考察する。

前稿では階層5で学習形態の転換が行われ、階層6以降で活動場所が学習センターから地域社会へと押し出して行くと考えた。この過程は学習センターごとに異なるであろう。前回の考察の継続性から今回も埼玉SCを事例として考察を行う。

3.2. 埼玉CSC交流会の考察

1) 埼玉SCの学生団体

全国の学習センターで同窓会とサークルの連携を行っている事例は複数見られる。それらの中で恒常的な組織を作り、取り組みを行っているのが埼玉SCである。学習センター¹⁶⁾、同窓会、学生団体（サークル）の交流、連携を図る組織として埼玉CSC¹⁷⁾交流会（以下CSC）が存在する¹⁸⁾。今回はCSCとサークルに焦点を当て埼玉SC全体で取り組みがどのように行われているかを考察する。このためCSC、同窓会、サークルを対象にして2019年の半年間にわたり概要、取り組み等について関係者に複数回のインタビューを行った。

埼玉SCにおける学生団体は14の公認サークル¹⁹⁾、放送大学埼玉同窓会と上述の埼玉CSC交流会²⁰⁾が存在する。サークルのカテゴリー分類は語学1、パソコン1、スポーツ5、文化・芸術1、人文・社会2、複数混合系4である。特徴として埼玉SCには講堂があり室内スポーツが学内で可能である。そのことから健康体操、ダンスなどインドアスポーツのサークルが多く存在する。また公認サークル以外に埼玉SC登録の同好会が8団体²¹⁾ある。

2) 埼玉同窓会

埼玉同窓会（以下同窓会）の活動は会員の親睦、情報交換、相互研鑽を図るとしている。また学習センターとの連携を図り一般講演会は共催として行われている。会員は2019（平成31）年1月時点で916名²²⁾である。なお同窓会は卒業生、修了生を会員対象としているが、放送大学の特徴である再入学生も会員となっている。

組織構成は役員（会長、事務局長、理事等）以外にスタッフ制を取り入れている。スタッフは総会ではなく役員会で承認され、役員と同じように同窓会の活動に関わる。同窓会に協力的な会員をスタッフに迎え、経験を積んだ上で役員になってもらう。スタッフの位置づけについては役員候補と言え²³⁾。スタッフ制度があることから役員・スタッフは総勢37名²⁴⁾、年齢層も30代から²⁵⁾となり機動的な運営できる。なお複数の役員に対して同窓会役員になった経過を聞くとサークル活動を通じてという回答があり、同窓会役員とサークルは密接に関わっている²⁶⁾。

3) 埼玉CSC交流会

CSCは上述のように学生団体、同窓会をもって構成し学習センターとの連携をもとに運営するとして²⁷⁾、2007（平成19）年7月に作られた。CSCの位置づけはCSC代表²⁸⁾によれば3者の連絡協議会的なものとのことであった。

CSCの活動は大きく2つ挙げられる。毎年秋に行われる学園祭である埼玉フェスタ（以下フェスタ）と年6回発行する学生新聞である。フェスタは2007（平成19）年から開催され、2019（令和1）年で第13回である。「学生新聞」は2009（平成21）年3月から発行され、2019（令和1）年8月時点で第64号まで発行されている。埼玉SCには他に年2回の同窓会会報、学習センターだよりの2つの機関紙が発行されている。「学生新聞」はタイムリーな広報・宣伝誌としての役割も持っている。

CSCがどのような組織によって成り立っているのか。上述の「学生新聞」に平成21（2009）年以降2019年度まで掲載されている役員体制を整理すると下記のようになる。

役員はCSCを構成する代表者会議で選出される。学習センターは代表者会議を構成するが役員には選出されていない。なお「学生新聞」の編集体制も代表者会議で選出される。

役員体制を見ると2012年度までは代表も毎回変わり、役員全体において構成サークルの交代もあり毎回変化している。しかし2013年度からは2016年度までは役員体制にほぼ変化がなく、2014年度から2016年度は役員内で構成サークルの交代が無く同じ体制といえ

¹⁶⁾ 本節で単に学習センターとした場合は、埼玉SCの所長を含んだ事務局を指す。

¹⁷⁾ CSCはC（学生サークル）、S（同窓会機関紙のさくら草）、C（学習センター）からとったもの。

¹⁸⁾ 埼玉学習センターの『2019年学習センター利用の手引き』35ページ。

¹⁹⁾ 14のサークルは「サークルおのみや」「パソコンサークルCompass」「ソーシャルダンスクラブ」「江戸時代の古文書を読む会」「埼玉英語倶楽部」「熟年会」「健康体操研究会」「ラルゴ体ほぐしの会」「未来の会」「朗読の会こころ」「バランス体操悠悠」「Wienerwald Musikfreude」「舞踏研究会」「むぎの会」、埼玉学習センターの『2019年学習センター利用の手引き』35ページ

²⁰⁾ 埼玉学習センターの『2019年学習センター利用の手引き』34～35ページ。

²¹⁾ 同好会の数については埼玉学習センター教務係からの聞き取り。

²²⁾ 埼玉SC『2019年度学習センター利用の手引き』35ページ。

²³⁾ 同窓会副会長のインタビュー。

²⁴⁾ 『埼玉同窓会会報 さくら草』第59号 12ページおよび2019年10月6日に行われた同窓会役員会の傍聴。

²⁵⁾ 2019年9月21日の埼玉学習センターの卒業証書・学位記授与式の同窓会会長のあいさつ。

²⁶⁾ 2019年10月6日の役員へのインタビュー。

²⁷⁾ 放送大学埼玉CSC交流会規約の第2条（構成と運営）。

²⁸⁾ 2019年10月6日のインタビュー。

表7 埼玉CSC交流会 役員名簿（サークル名で表示）

年度	役員数	代表	副代表	会計	監事	事務局長	その他の役員
2009	9	古文書	同窓会、Cおおみや、トレヴィイ、うえるかむ、熟年会	健康体操	健康体操	熟年会	
2010	7	Cおおみや	同窓会、トレヴィイ、古文書、熟年会	健康体操	ラルゴ	古文書（兼任）	
2011	11	熟年会	Cおおみや、トレヴィイ、ソーシャル、ソーシャル、未来、同窓会	朗読、健康体操	同窓会	古文書	
2012	10	朗読	Cおおみや、未来、熟年会、同窓会	ソーシャル、健康体操	同窓会	古文書	熟年会（相談役）
2013	9	未来	Cおおみや、熟年会、同窓会	健康体操、ソーシャル	朗読	古文書	同窓会（相談役）
2014	10	未来	同窓会、熟年会、古文書	健康体操、	朗読	Cおおみや	ソーシャル、悠悠、同窓会（事務委員） 同窓会（相談役）
2015	11	未来	同窓会、熟年会、古文書、ソーシャル	健康体操、悠悠	朗読	Cおおみや	同窓会（事務委員）、Cおおみや（相談役）
2016	11	未来	同窓会、熟年会、古文書、ソーシャル	健康体操、悠悠	朗読	Cおおみや	同窓会（事務委員）、Cおおみや（相談役）
2017	17	未来	同窓会、古文書、熟年会	健康体操、	朗読	Cおおみや	同窓会、英語（事務局長）、パソコン、ソーシャル、健康体操、ラルゴ、悠悠（理事）、Cおおみや（相談役）
2018	19	未来	同窓会、ラルゴ、熟年会、むぎの会、WWM	健康体操、健康体操	朗読	Cおおみや	英語、同窓会（事務局長）、ソーシャル、悠悠、舞踏、古文書（理事） 同窓会、同窓会、古文書（相談役）
2019	21	ラルゴ	同窓会、熟年会、むぎの会、WWM	ソーシャル、同窓会	朗読	同窓会	同窓会、同窓会（事務局長）、Cおおみや、古文書、英語、英語、健康体操、未来、悠悠、舞踏（理事） 同窓会（相談役）

注：サークル名は略称で正式なサークル名は注19を参照、一部に現在は解散したサークルがある。

同一の年度に同じサークル名が複数あるのはサークルから複数の役員を選出しているため。

出所：「学生新聞」3号、9号、15号、20号、32号、38号、44号、50号、57号、62号から川島作成。

る。外形的には硬直化したとも見える。

そのような点の改善からか2017年度からは新規に理事が置かれ大幅に役員が増えている。2019年度はほぼすべてのサークルから役員が選出されている。さらに2019年度からはフェスタはCSCの下部組織として実行委員会を組織し、取り組まれている²⁹⁾。以上の点から2017年以降はCSCの体制が大きく変化していることが分かる。

4) フェスタの取り組み

フェスタは他の学習センターが行う学園祭と同じようにサークル、同窓会が展示、イベント、バザーなどを行い学外の人にも開放するものである。2019年度のフェスタでは絵画・書道の作品展示会において学外の造形サークル「パレット」³⁰⁾の作品を展示し、作者者を招待する取り組みを行った³¹⁾。

フェスタの特徴は土日の2日間の1日目に行う音楽

祭である。2017（平成29）年度のフェスタ³²⁾までは公開講演会を行っていた。2018（平成30）年度から「音楽の祭典 in 大宮」と題してイベントが取り組まれた。終日学習センター内の講堂で個人演技、合唱、学外のバンドによるジャズライブが行われた³³⁾。2019年度も同様に音楽祭が開催された³⁴⁾。

すでに述べたように2019（令和1）年第13回フェスタの実施からCSCのもとに実行委員会を組織して取り組まれた。CSCの大きな目的自体がフェスタを実施する点でありながら実行委員会を別途組織した理由は下記による。

「学生新聞」第63号（2019年6月21日付）の記載によれば、「過去の12回のフェスタでは各サークルがそれぞれの活動を中心に活発に行われてまいりました。この流れをサークルや同窓会にも所属していない一般学生にも参加を呼びかけ、面接授業やテストの他に大

²⁹⁾ CSC事務局長のインタビュー。

³⁰⁾ 「パレット」は中学校特別支援学級を卒業した生徒たちがメンバーの創作サークル（むぎの会代表のインタビューから）。

³¹⁾ この取り組みは埼玉学習センターの客員教授による学習会「絵画サロン」が関わっている（むぎの会代表のインタビューから）。

³²⁾ 第3回から第12回までのフェスタの取り組みや内容については学生新聞の各号に掲載されている。

³³⁾ 「学生新聞」59号（2018年10月19日付け）の記載

³⁴⁾ 「学生新聞」64号（2019年8月23日付け）の記載およびCSC事務局長のインタビュー。

表8 埼玉学習センターのサークルインタビュー要覧

	ソーシャルダンス	英語倶楽部	熟年会	健康体操研究会	ラルゴ体ほぐしの会	朗読の会	WWM	舞踏研究会	むぎの会	バランス体操悠悠	スポーツ吹矢・運営正鶴会(同好会)	俳諧研究「つみ草」(同好会)
サークル内連絡	サークルHP・メール	3つのコースあり、コースごとにリーダー決めメールを配信	メーリングリスト、紙の予定表も配布	face to face	face to face	メール(添付資料がある)一部はショートメール	メールとHP	メール、紙の予定表も毎回作成	むぎの会は催し物の企画・運営を行うサークル	face to face	基本的にはメールを使用	face to face
他のサークルとコミュニケーション	CSCがあることでフェスタがやりやすい	特にSC内では無いが、他のSCとは連絡がある	CSCでサークル間で顔を合わせているので風通しは良いのでは	サークル内で他のサークルの情報も交換して互いに誘い合っている	CSCで横のつながりができている	CSCがあるので他のサークルとコミュニケーションが取れる	合唱の関連で文京、神奈川の合唱グループとも交流がある	(インタビューもれ)	WWH、同窓会、朗読の会など催し物を共催	サークルのメンバーが他のサークルに入っているのが個人的つながりがある	他のサークルとは個人的な関係で同好会としては特に行っていない	メンバーが他のサークルに入っているのがコミュニケーションが取れる
メンバーが他のサークルに参加しているか	2から3割が他のサークルに参加	特にいないか	半数は他のサークルに入っているわけではないか	2~3人を除けば、それ以外はほぼ他のサークルに入っている、中には3から4つに入っている人もいる	他のサークルに入っている人はそれほど多くはないか	半数は他のサークルに入っている	ほぼ全員が他のサークルに入っている	半数は他のサークルに入っている	大半が他のサークルのメンバー	12名のメンバーの内8人ほどは他のサークルに入っている	メンバーのほぼ全員が他のサークルに入っている、中には3つ以上入っている人もいる	ほとんどメンバーが他のサークルに入っている
フェスタの参加内容	講堂でフォーメーションダンス、ダンス体験	18年度から参加、講義室で英語教室・レッスン	講義室で公開勉強会、実習室で公開パソコン教室	講堂でのバレーダンスショー	なし	講堂での朗読劇	講堂での合唱、演奏会	講堂での演技発表会	ロビーで復興バザー	ロビーによるサークル紹介	参加していない	講義室に会員の作品を一句、短冊に展示
CSCについての感想	発表会の呼びかけが容易、OB・学生に宣伝できる	CSCには以前から参加しているがフェスタは18年からのためこれから	学生を巻き込んで学園を創っていく、放送・面接授業だけでなく学生が主体となる活動の意味は大きい	CSCがあることで他のサークルとのフェスタに対する協力関係が作れる	CSCで横のつながりができている	フェスタを行うには事前調整が必要CSC(実行委員会)があるのでコミュニケーションが取れる。	CSCがあることでサークル間のつながりが良好になっている	CSCがあることで発表会も見えてもらえサークルにも入ってもらえる	CSCの中で地域活動の企画・運営に取り組む	CSCでサークルの代表が一同に会するので、他のサークルの様子がよくわかる	CSCがあることで学生としての仲間づくりができる	フェスタには以前から参加
地域への関わり方	個人レベルが老人福祉施設でダンスを披露、一緒にダンスも参加してもらおう	個人的にホームステイを手伝っている	特にサークルとしては取り組んでいない	バレーダンスでさいたま市浦和のボランティアネットワークに参加・老人ホーム方を訪問、社協のフェスティバルに参加	特に行っていない	フェスタで外の人たちを呼ぶ。自主発表会には一般の人も見に来てもらう。鉄道のまちフェスタに参加。	学外でサークルの演奏会を行っている。19年はNPOオペラ「ナブッコ」に有志が合唱団として出演する。	個人として人々の場で踊れるよう、パーティーなど外に出ていけることを目指している	陸前高田復興支援、お掃除実践紹介、鉄道フェスタへの子ども相談で参加など	サークルとして行っていないが、個人的にはボランティア活動など行っている	外部のスポーツ吹矢協会とは協会ベースではなく学生が行う組織として適度な距離を保っている	外部の結社に個人として繋がりが
その他		エッセイ集をタイムリーに発行(年1回程度)している、他の学習センターの英語サークルに寄贈している。		個人が複数のサークルに入っていることでサークル間の関係ができる		発表会にマスコミに向けて広報活動をおこなっている、公民館や役所にも宣伝チラシを置く取り組みをしている	CSCは学生団体の集団なので学生団体が行うフェスタになっている。19年は一般の学生も参加しやすいよう実行委員会として取り組んだ	学外の人でフェスタで見てもらい入学しサークルも入ってもらった事例がある	学内で行われる一般参加型の催し物への企画・運営や学外への取り組みにも参加。サークルと地域を結びつけるインターフェイス型サークル	個人的な取り組みで学外のグループを通じて、老人福祉施設で体操のボランティア活動を行うなどの事例がある	外部のスポーツ吹矢協会とは個人ベースでは活動している、持ちつ持たれつとの関係をとっている	

出所 サークル代表等のインタビューをもとに川島作成

学に来ない多くの学生に呼びかけ」るためにサークルを離れて個人の資格での実行委員会を立ち上げたとされる³⁵⁾。実行委員会には学習センター職員も参加した。実行委員会は4月から初めて開催後の会計決算の10月7日まで都合10回開かれた³⁶⁾。

5) 埼玉SCのサークル活動インタビュー

埼玉SCのサークルは14、同好会は8である。これらの学生団体から10のサークルと2つの同好会の活動と相互のネットワークなどについて代表者³⁷⁾へのインタビューを行った。以下がそのインタビューの要点をまとめてものである。以後特に記載しない場合はサークルには同好会を含んだ用語として使用する。

インタビュー要約 (表8参照)

サークル内のコミュニケーションでは7つのサークルがメールを使用している。face to faceのみは4サークルであった。ただしメールを利用しているサークルもface to faceも行っている。サークルという同一の取り組みを持つ性格からもface to faceが基本となるネットワークを形成している。

他のサークルとのコミュニケーションはサークルのメンバーが他のサークルとの重複加入³⁸⁾の割合で関係形成が異なる。半数以上が重複加入しているサークルは9サークルであった。当然ではあるが重複加入が多いサークルではメンバー間のコミュニケーションがそのままサークル間のコミュニケーションとなる。一方、他のサークルへの重複加入者が少ないサークルはCSCによるサークル間のコミュニケーションが重視される。ただしこの関係形成の違いによりCSCの位置づけが異なるわけではない。どちらの場合でも基本的にはCSCがあることでコミュニケーションが良好に取れていることがインタビューから確認できる。

CSCの機能についてはサークル間のコミュニケーションの形成と共にフェスタの取り組みが上げられる。今回インタビューを行った12のサークルでは、10のサークルがフェスタに参加している。フェスタに参加する際には調整・運営のコミュニケーションが必要となる。

インタビューからCSCが存在することで良好なコミュニケーションが形成されていることが分かる。同時にフェスタへの取り組みから連帯感が生まれる点があげられる。フェスタ自体はサークル活動を供覧する場としての性格が強い。普通ならばサークルの誇示のみを表現する場ともなる。しかし恒常的組織としてのCSCでの交流を通じることでフェスタへの協力関係・連帯感が醸成されることが分かる³⁹⁾。またCSCが存在する

ことでフェスタ以外の場でのサークルの発表会などの宣伝などができることが分かる。

地域貢献活動においては一部のサークルで地域のボランティア活動を行っているが、多くの場合個人的な関わりとなっている。一方、フェスタにおいては学外団体の参加やサークルむぎの会による復興支援の催しなどCSCとして社会貢献活動が取り組まれている。

3.3. 埼玉SCにおけるインタビュー分析

埼玉SCの特徴はCSCの存在である。CSCはフェスタの開催が重要な目的⁴⁰⁾である。同時にCSCという恒常的組織があることで、フェスタを行う意思の統一が行われてサークル間のコミュニケーションも恒常的に形成されている。CSCがフェスタだけでなく埼玉SCのサークル間ネットワークのプラットフォームになっている。

このプラットフォームは、サークル間の組織形態としてのCSC自体の組織のネットワークと、サークルに重複して会員となっている学生間のネットワークにより形成されている。学生間のネットワークは重複加入により使用頻度の高いネットワークになる。それゆえに学生間のネットワークにより形成されるサークル間のネットワークはインフォーマルに構築される。しかしこのネットワークはサークルのインタビューから見られるように、サークルにより重複加入の割合に大小が生じている。必然的にサークル間のインフォーマルなネットワークには濃淡⁴¹⁾が生まれる。CSCはサークル、同窓会の間に組織のネットワークを構築しインフォーマルなネットワークの濃淡を解消している。すなわち各サークルの代表がCSCで恒常的に一同に会することでコミュニケーションが取れ形成されている。インタビューの「CSCがあることで他のサークルの様子が見える」などはこのことを端的に表している。CSCは恒常的な組織として毎年開催するフェスタという共有の目標を持つことで、コミュニケーションを継続に維持することが可能となる。フェスタの取り組み過程が継続性を生みだしている。同窓会についてはすでに述べてように役員の相当数がサークルのメンバーでありこの場合も重複している。ネットワークの関係はサークル間と同様と理解できる。

CSCは学習センターも構成員とすることでフォーマル機能として、学習センターとサークル、同窓会間の公式な橋渡し機能を持っている。CSCはサークル活動という中間的でインフォーマルなコミュニティとフォ

³⁵⁾ 「学生新聞」第63号の記載をもとに実行委員会委員長にもインタビューを行った。

³⁶⁾ CSC事務局長のインタビュー。

³⁷⁾ インタビューを行ったサークルの代表はほぼ全員が放送大学学部、大学院の卒業生、修了生であった。また大半が複数回の卒業をしている。

³⁸⁾ 重複加入が行われる要因は多様であるが、健康体操研究会のインタビュー「サークル内で他のサークルの情報を交換し誘い合っている」が一つの解になる。

³⁹⁾ フェスタに参加していないサークルもCSCにより連帯感は共有される(ラルゴ、正鶴会のインタビューから)

⁴⁰⁾ CSC代表と事務局長からのインタビューによる。

⁴¹⁾ 重複加入によるネットワークはその割合が低い場合でも形成されている。少ないと回答したラルゴでも複数加入している人はいる(ラルゴのインタビューから)。

ーマル組織である学習センターを結びつけることで、学生団体としての自主性を持ちながらフォーマルなコミュニティ組織を創り上げている。

またCSCはサークル・同窓会を構成員とすることで、属人的な個人パーソナリティを基盤にして形成されていない。一時期、CSCの役員体制が硬直し数年間メンバーが変わらない期間があった。しかしこの役員体制もサークル・同窓会からの選出である。それゆえにプラットフォームとしての機能が継続性（恒常性）を持つことになる。13年の期間を経ても継続される要因はこの点にある。さらに2017年度からは徐々に役員体制が変化し、より組織的な体制になってきている。

4. 考察

4.1. 群馬SCと埼玉SCの事例研究からの考察

1) 群馬SC「生物研究会」のネットワーク

「生物研究会」のネットワークの中に人々を社会貢献活動や地域貢献活動に送り出す仕組みがあるのか。1.2. の課題で述べたように、放送大学や群馬SC「生物研究会」のネットワークの中に、地域貢献活動へ移行する合理的な「仕組み」や「システム」があるのか。どのような機能があるのかについて図3の仮説を基に、考察を進める。

ここでは「仕組み」や「システム」を仮に「プラットフォーム」と呼ぶ。一般大学では、卒業生あるいは修了者に向けてキャリアカウンセラーなどの配置と共に就職支援など「出口」機能がフォーマルに整備されている。社会人学生や、定年退職者の学生が多数を占める⁴²⁾放送大学では、このような機能はフォーマルな形式で供給されていない。放送大学は、卒業生、修了

生であっても継続して、或いは戻ってきて学びなおしをする大学である。放送大学での生涯学習の出口の一つが地域貢献や社会貢献活動であるならば、そのプラットフォームと「出口」、地域への「入口」へのインターフェースが放送大学や学習センター、サークル活動、その外部ネットワークを通じてインフォーマルに供給される可能性があるのではないか。これが本節の課題である。

2) 放送大学からプラットフォーム（学習センター・サークル活動）へのインターフェースについて

フォーマルな教育機関である放送大学からインフォーマルな組織への移行部分である。プラットフォームとして群馬SC「生物研究会」とそのネットワークを想定して考察を進める。これまでの議論でフォーマルな組織＝放送大学からインフォーマルな組織＝サークル活動への転換条件は何か。それは、バーチャルコミュニティからリアルな「時間コミュニティ」への移行であり、フォーマル学習からインフォーマル学習への転換である。バーチャルコミュニティの学習集団から、ある目的（＝ミッション）を持って集まるリアルな集団、或いはミッションに共鳴する集団に転換する必要がある。顔の見えない集団から顔の見える集団への変容である。それは藤生氏の事例研究で述べたように、他人への関心、興味、挨拶から始まる誰だか知らない他人からface to faceの仲間への転換である。小さな変化で言えば挨拶することから始まる行動の変化である。

3) 埼玉SCのCSC通じた地域貢献・社会貢献

埼玉SCがある埼玉県は典型的なベッドタウン地域で、所属学生・卒業生は新住民が多数となる都市型の学習センターである。そのため生まれ育った地域に住

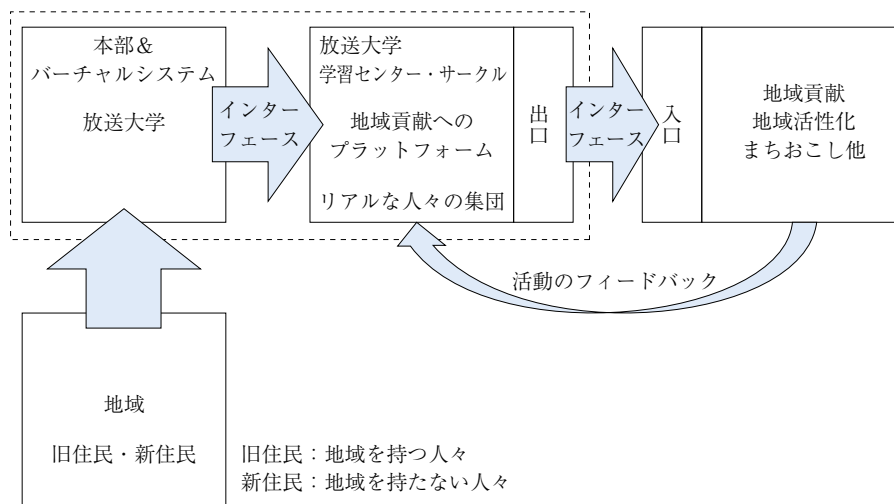


図3 放送大学群馬SCの地域貢献イメージ図

出所：吉田作成

⁴²⁾ 2019年10月5日付で放送大学のWEB (<https://www.ouj.ac.jp/hp/gaiyo/who.html>) に掲載情報によれば、2019年度1学期に在籍する特別聴講学生を含む教養学部在籍数約90,000人の内訳は、会社員（21.3%）、看護師等（12.9%）、定年退職者（9.9%）、公務員・団体職員等（8.4%）、教員（7.0%）、自営業・自由業（6.1%）、農林水産業従事者（0.3%）で、これらで全体の65.9%を占める。

まない人々、職場と居住地が異なる人々、地域に密着性を持たない人々が多数となる、群馬SCに比較し地域との関係は希薄となる。サークル活動も多くは直接の地域との関係を持ち難い。このことはインタビューが示すように、埼玉SCのサークルの多くが直接的に地域の貢献活動に関わっていない点に表れている。学生・卒業生と地域の間インフォーマルなネットワークが形成されにくい。この関係を補うのが橋渡し機能を持つCSCと言える。

CSCは個人のパーソナリティのみに依拠しない中間団体であるサークル・同窓会間の組織である点から、個人として居住地域に結びつきが無くても地域貢献・社会貢献に関われる。埼玉SCの学生団体においては群馬SCの「生物研究会」、「若宮クラブ」のように地域社会へ出て行くという取り組みとは異なった地域への活動が行われる。

この取り組みには埼玉SCの地域・場所・施設の以下の特徴があげられる。すなわち、地域においては埼玉SCが所在するさいたま市⁴³⁾が首都圏の政令指定都市で、周辺市町をも含めて人口規模が大きい点、場所においては東京都以北で最大の鉄道交通の要所である大宮駅⁴⁴⁾に隣接して利便性が良い点、施設においてはほぼ駅前の公共ビルの3フロアを占有し、フロア内にステージ分を除いても100人収容規模の講堂を持つ点⁴⁵⁾である。

これらから埼玉SCにおいては、集客性がありアクセスが容易で多様な行事が可能であるという特徴が見いだせる。一般公開講演会も学内のみならず学外の人々も参加しやすい。人口規模が大きい都市型地域であることから、文化、芸術団体も多数存在する。それらの学外の人々の取り組みも取り入れることが容易となる。

CSCにおいても目的の一つに地域社会への貢献を掲げている⁴⁶⁾。この特質を有効利用した地域貢献・社会貢献が行われる。フェスタにおける音楽祭の学外のバンドによる「ジャズ・コンサート」はその一つである。また前述した創作サークル「パレット」の作品展示も同様の取り組みといえる。フェスタのみならず一般向けに埼玉SCとサークルの共催で継続して行われている『「3.11を語る・伝える」学生交流会」陸前高

田復興支援⁴⁷⁾の取り組みも社会貢献の一つである。学生・卒業生が自らの居住地とは限らない地域との文化的、芸術的主体とした活動を行っている。

埼玉SCにおける地域貢献・社会貢献は、地域に出ていくのではなく、センターの特質を有効に活用しCSCというフォーマルなコミュニティの組織体がフェスタや公開講座などに学外の団体、人々を放送大学内に取り込む点にある。外部との取り組みを包摂するネットワーク形成（外部との協働）にある。

埼玉SCの取り組みでさらに特筆する点は、CSCに大学組織である学習センターが構成員として参加している点である。サークル・同窓会は学習センターなしには存在しない。CSCにより学生団体と存在基盤である学習センターとの間に恒常的な協議機能が構成されている。学習センター側からは一般講演会なども含めて大学行事に学生団体を取り込む協働関係が形成できる。学生団体側は学習センターが加わることでCSCが対外的にフォーマルな組織として認知される。学外に対して信頼性を与え協働関係が得やすくなる。同時に学生・卒業生が持つ地域・社会との関係を結びつけることで、学習センターにおける地域貢献のプラットフォーム機能も形成される⁴⁸⁾。学習センターと学生団体との関係形成の取り組み事例となる。

放送大学の地域貢献には各都道府県に設置されている学習センターの機能なしには成しえない。特に埼玉SCの事例のように学習センターには規模の大小はあるものの講義室などの施設機能を有している。また客員教員も含めて高度人材機能⁴⁹⁾を有している。CSCの事例は学習センター機能を有効利用した取り組みといえる。学生・卒業生と共に、放送大学としての地域貢献の方向性を見出せるのではないかと。

現在CSCは学外の団体を埼玉SCの行事、施設に取り込む活動が主体となっている。しかしNPO法人オペラ彩への出演、ベリーダンスの社会福祉協議会でのボランティア活動⁵⁰⁾、創作サークル「パレット」の絵画展覧などNPO等との協働関係も築かれつつある。

今後はCSCから得られた学外との関係をもとに、サークルが独自にNOPなどに協働関係を築いていくのではないかと。特にサークルWWMの学生有志による、

⁴³⁾ さいたま市の人口は2019年10月30日時点で約130万人<https://www.city.saitama.jp/006/013/005/001/p063072.html>

⁴⁴⁾ 大宮駅には東北・上越・北陸新幹線、JR高崎線、JR宇都宮線、JR京浜東北線、JR埼京線、東武鉄道野田線他が乗り入れている。

⁴⁵⁾ 埼玉学習センター『2019年学習センター利用の手引き』23ページの施設の案内参照

⁴⁶⁾ 埼玉学習センター『2019年学習センター利用の手引き』35ページ参照

⁴⁷⁾ 陸前高田復興支援の取り組みも、津波で子息をなくした体験の絵本「ハナミズキのみち」の作者を迎えての報告会や復興支援チャリティコンサートの開催であり文化・芸術的な取り組みである（むぎの会代表のインタビュー）。

⁴⁸⁾ CSCが直接ではないが、学習センターとの協働関係から2019年6月に開催のさいたま市、JR東日本・大宮支店主催『鉄道のまち大宮 鉄道ふれあいフェスタ』には埼玉学習センターとむぎの会、朗読の会こころの共同企画で参加を行った。むぎの会はこどもなんでも相談コーナー、朗読の会こころはこども対応の紙芝居を行った（むぎの会代表、朗読の会こころ代表のインタビューから）。

⁴⁹⁾ 埼玉学習センターの絵画サロンによる展示、復興支援、オペラ参加などには客員教員が関わって取り組まれている（むぎの会代表、WWM代表のインタビューから）。

⁵⁰⁾ さいたま市社会福祉協議会とボランティアグループで構成されている「浦和区ボランティアネットワーク」に健康体操研究会の内部グループであるベリーダンス（会）が「社会活動グループ ラスビローズ」として参加している。活動は老人ホームなどでベリーダンスを公演するとともに、入居者と簡単な体操と一緒に行うボランティア活動を行っている（健康体操研究会のインタビューから）。

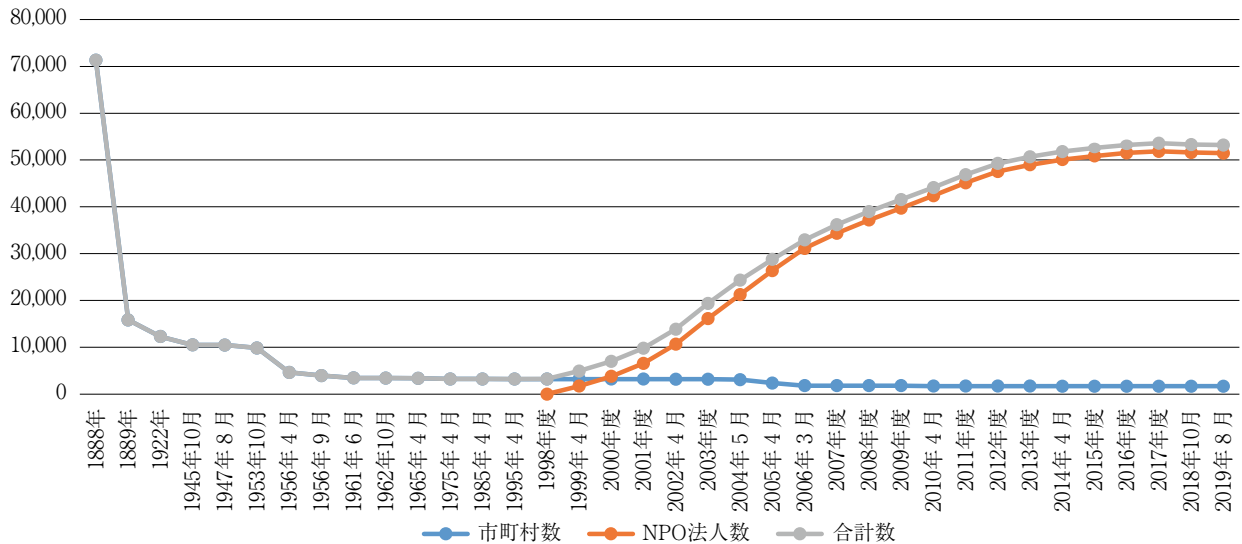


図4 市町村数と比較したNPO法人数推移

出所：総務省データ⁵¹⁾及び内閣府データ⁵²⁾より吉田作成。

前述の学外のNPO法人オペラ彩⁵¹⁾に合唱としての参加では、居住地による直接的な地域貢献ではなく、和光市の文化芸術公演という取り組みを通じ、都市住民型の地域貢献・社会貢献活動に取り組んでいる。

埼玉SCの事例考察は、群馬SCとは異なる都市型学習センターにおける学生・卒業生のサークルによる地域のNPOなどのかかわり方の具体例を示している。

4.2. 地域貢献・社会貢献の入口はどこにあるのか

「地域コミュニティ」の母体となってきた、市町村数の推移とNPO法人数の推移及びその合計数の推移を比較したグラフを図4に示す。1888年に71,314あった市町村数は、NPO法人が登場する1998年に合併などにより、3,234まで減少した。更に、2019年8月現在、1,718まで減少したが、その一方で、1998年度から認証がスタートしたNPO法人数は、2017年度に53,586のピークに達し、その後わずかに数を減らし、一旦、平衡状態に入っているように見える。現在の市町村数と「新しいコミュニティ」であるNPO法人数の合計数が、1888年の71,314に対して75%程度まで戻していることは興味深い。どんな意味があるのだろうか。

「新しいコミュニティ」としてのNPO法人は、地域で様々なミッション（使命）やテーマに取り組んでいる。NPO法人は、市町村と異なり地域そのものではないが地域が抱える諸課題に対する「中間的な集団」

であり、「中間領域」、又、ミッション（使命）・テーマ別にテンポラリーに人々が参加する「時間コミュニティ」である。行政は「全ての人」に対する公益サービスであり、NPO法人はそれより小さい領域の公益・共益サービスを提供する。明治以来の大合併により行政単位が大きくなり、市町村数が大幅に減少した。行政が拾いきれない課題に対応する団体としてNPO法人の必要性が求められている。地域貢献や社会貢献を考える際にNPO法人活動は、地域や社会に対する「中間的集団」或いは「中間領域」としても地域コミュニティに対して重要な役割を担っていると考えられる。

NPO法人の活動に触れ、体験し、参加することは地域社会の課題やニーズへの対応を間近で経験することになることが明確だと思われる。こうしたNPO法人の活動は（ボランティア団体など法人化されていない団体・組織の活動を含め）地域貢献・社会貢献への大きな入口の一つといえる。

地域に密着する活動を行うNPO法人や環境活動、社会福祉法人などの運営者を取り込んでいる「生物研究会」のネットワークは、地域貢献活動・社会貢献活動などへの入り口を複数持っているといえる。4.1 2)の議論と併せて、サークル活動が行われている学習センターは、放送大学と地域貢献へのプラットフォームとして特定できると考える。

⁵¹⁾ WWMの有志が合唱で出演するオペラ「ナブッコ」は特定非営利活動法人オペラ彩と和光市、財団法人和光市文化振興公社が主催する「2019年度 文化庁 文化芸術創造拠点形成型事業」である。この合唱には東邦音楽大学、短大、高校の有志、埼玉県立浦和高校グリーンクラブ、和光市内児童合唱団も出演する。なお公式には放送大学埼玉学習センター合唱団有志として出演する和光市ホームページ<http://www.sunazalea.or.jp/event/detail.cgi?key=20190830103737> 2019年10月30日確認。

⁵²⁾ 総務省 市町村数の変遷と明治・昭和の大合併の特徴www.soumu.go.jp/gapei/gapei2.html 2019年10月24日確認。

⁵³⁾ 内閣府 特定非営利活動法人の認定数の推移 <https://www.npo-homepage.go.jp/about/toukei-info/ninshou-seni> 2019年10月24日確認。

表9 「生物研究会」10年間の行事場所と目的

		ノード行事				
		総行事数	場所別目的別	種類		
放送大学 「生物研究会」 サークル活動	時間 コミュニ ティ	203回	SC内行事 78回	106種類	中間的 集団	時間 コミュニ ティ
			SC外行事 110回			
			研究成果発表会 15回			

出所：吉田作成

4.3. 学習センターの地域貢献・社会貢献へのプラットフォーム機能とは何か

1) 「生物研究会」の活動

群馬SC「生物研究会」は平成16年から平成28年までに203回の行事を開催した（表9参照）。これまで述べてきたように、同会はネットワークのノードが関与する多様なミッションへ「時間コミュニティ」を作ってメンバーやサポーターを送り込み、能動的学習や地域貢献活動を提供している。多彩なノードが提供する多様な活動を学ぶ機会を提供することで「生物研究会」の活動は大きな広がりを持ったものになった。「生物研究会」のノードが提供する「時間コミュニティ」に対して、外部の「時間コミュニティ」を連結することがプラットフォームの役割だと思われる。連結された「時間コミュニティ」には、ノード側の人々と「生物研究会」側のメンバーがおり、活動のミッションを学び、活動に参加することで、人と人との交流が生まれる。

2) 「生物研究会」の「グループ学習」と「実践活動」の分析

表1では階層4と階層5の間で、「個人学習」から「グループ学習」へ転換し、階層7及び階層8において「実践活動」が加わることを記載した。その意義について考察を加えたい。

センゲは『学習する組織』（センゲ 2011）において、「学習する組織」の要として「システム思考」、「学習する組織」の核となるディシプリンとして「自己マスタリー」、「メンタル・モデル」、「共有ビジョン」そして「チーム学習」を挙げている。これら5つのディシプリンに関し引用する。

「自己マスタリー」

- 個人が学習することによってのみ組織は学習する。個人が学習したからといって必ずしも「学習する組織」になるとは限らない。が、個人の学習なくして組織の学習なし、である（センゲ 192）。
- 「自己マスタリー」は、個人の成長と学習のディシプリンを指す表現である。高度な自己マスタリーに達した人は、人生において自分が本当に求めている結果を生み出す能力を絶えず延ばして行く。学習する組織の精神は、こうした人々のたゆまぬ

学びの探求から生れるのだ（センゲ 194）。

- ここで述べている「学習」というのは、知識を増やすという意味ではなく、人生で本当に望んでいる結果を出す能力を伸ばすという意味だ。それは生涯つづく生成的学習である。学習する組織は、あらゆる階層でそれを実践する人がいなければ成り立たない（センゲ 196）。

「メンタル・モデル」

- もっと具体的に言うと、新しい見識を実行に移すことができないのは、その見識が、世の中とはこういうものだという心に染み付いたイメージ、つまり慣れ親しんだ考え方や行動に私たちを縛り付けるイメージと対立するからだ（センゲ 240）。

「共有ビジョン」

- 共有ビジョンは「学習する組織」にとって不可欠なものである。共有ビジョンがあることによって学習の焦点が絞られ、そして学習のエネルギーが生れるからだ。適応学習ならばビジョンなしでも可能だが、根源から創造する生成的学習は、人々が自分たちにとって大いに意味のあることを成し遂げようと懸命に努力している時のみに起こる（センゲ 281-282）。

「チーム学習」

- チームが学習できることを私たちは知っている。スポーツや芸能、科学、ときにはビジネスにも、チームの英知がチーム内の個人の英知に勝つことや、チームによって協調的行動の驚くべき能力が生み出されることを示すさまざまな例が存在する。チームが真に学習するとき、チームとして驚くべき結果を生み出すだけでなく、個々のメンバーも、チーム学習がなかったら起こり得ないような急激な成長を見せる（センゲ 44）。
- チーム学習はきわめて重要である。なぜなら、現代の組織における学習の基本単位は個人ではなくチームであるからだ。肝心なのはここである。チームが学習できなければ、組織は学習しえない（センゲ 45）。
- 個人の学習は、あるレベルでは、組織の学習と関連がない。個人がつねに学習したところで、全く組織の学習にはならないからだ。しかし、チームが学習すれば、組織全体の学習の縮図になる。チームが得た洞察は行動に移される。チームで開発されたスキルは、ほかの個人に、ほかのチームに展開することが可能だ（実際に展開する保証はないが）（センゲ 318）。

「システム思考」

- システム思考は、すべてのディシプリンを統合し、融合させて一貫性のある理論と実践の体系をつくるディシプリンである（センゲ 47）。

センゲの5つのビジョンと「生物研究会」のネットワークの広がりや、階層が示す変容の意味を考えてみたい。「自己マスタリー」について、2)で引用したよ

うにネットワークの「アクター」やNPO法人のオーガナイザーが自己マスターリーの実践をする人と考えられそうである。「メンタル・モデル」は、「メンタル・ブロック(=障害)」と言い換えられる。思考方法の「障害=ブロック」は、ネットワークの多様性がもたらす新たな活動において、「アクター」がファシリテータとして研究大会などで課題を共有する際に、グループ学習者が自ら「気付き」に至ることで「メンタル・ブロック」を打破し、新たな発想を得ているのではないかと推測される。「チーム学習」について、「生物研究会」の「グループ学習」とセンゲの「チーム学習」の論点を置き換えてみると非常に興味深い。

「生物研究会」は固定メンバーは10名程であるが、30名程のサポーターが行事により入れ替わり参加する。「生物研究会」が表1の階層4までの「個人学習」と階層5からの「グループ学習」への転換点を持っていることは、こうしたメンバーの「グループ学習」が「生物研究会」本体に与える測り知れない大きな効果を、センゲの「チーム学習」論から見る事が出来そうである。また、2)や9)のポイントは、放送大学での理論学習やサークル「生物研究会」の学習階層7および8の実践活動と類似している。

小活：バーチャルコミュニティからリアルコミュニティへの転換

人々の地域貢献活動への流れを図5に整理する。

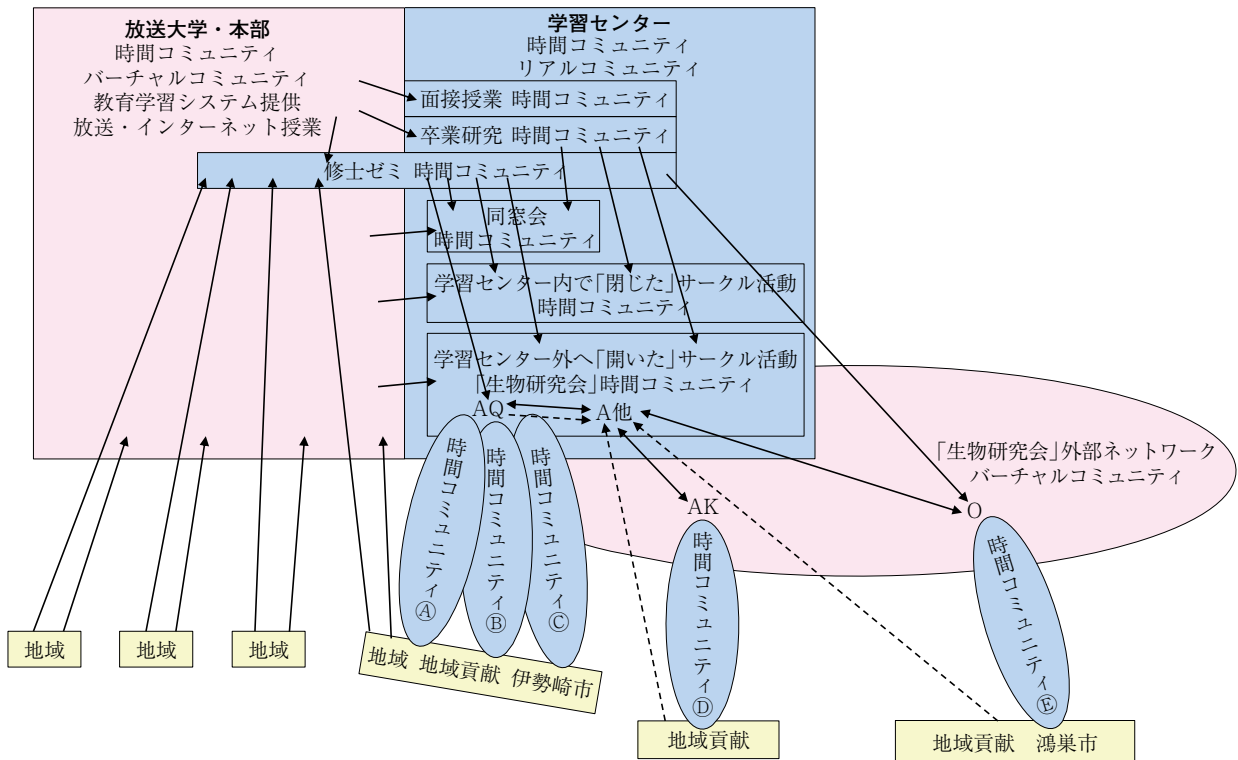


図5 放送大学・群馬SC・サークル「生物研究会」とそのネットワークにおける地域貢献への人の流れ
出所：吉田作成

- 1) 図3の地域を持つ人々(旧住民)と地域を持たない人々(新住民)は、図5が示すように、いずれも地域から放送大学に吸い上げられる。
- 2) 藤生氏の活動の場では、藤生氏自身の居住する伊勢崎市で旧住民と新住民を融合する活動で「地域活性化(まちづくり)」を目指すパターンである。藤生氏はその活動を放送大学にフィードバックし、自己の活動情報の共有化を図っている。
- 3) 放送大学に吸い上げられた人々は、そのまま地域に戻る人々と、大学院進学、学習センターの同窓会、サークル活動などに参加するグループに分かれていく。
- 4) 群馬SCでのサークル活動へのインターフェースはとても単純なものの可能性がある。群馬SCでは出入りする学生に必ず一声かけるのである。「あいさつする、一声かける」という行為は藤生氏の修士論文でも地域活性化にとり重要な論点の一つである。
藤生氏の活動紹介で触れたように、バーチャルコミュニティの紐帯を持たないメンバーがface to faceの紐帯を持つ「仲間」へと転換する。
- 5) 同窓会、サークル活動には、外部に開いたものと外部に閉じたものがあり、「生物研究会」はそのネットワークが示すように、外部に開いたサークルで、学生は地域貢献活動や社会貢献活動へ参加していく可能性が高くなる。
- 6) Oが示す川島氏、AKが示す中島氏などNPO法人の

運営者（オーガナイザー）が地域貢献活動の「時間コミュニティ」を供給する。一方でAQで示す藤生氏はの活動は、旧住民の立場から新住民との融合を図る仲間づくりをしている。この活動を学習センターでも行い、バーチャルコミュニティからの仲間づくりをしているのである。

- 7) 「生物研究会」とそのネットワークは、NPO法人のオーガナイザーが供給する「時間コミュニティ」に対して、これに連結し、「時間コミュニティ」をメンバーに提供する事である。
- 8) これらが「プラットフォーム」の「出口」であり、地域貢献活動や社会貢献活動への「入口」だと考えられる。ただし、放送大学は卒業や終りのない大学（＝生涯学習の継続）である。地域貢献活動参加後、「生物研究会」へ立ち戻るサイクルを繰り返す。
- 9) こうした人の流れのサイクルを多様な分野で実現する為には、「生物研究会」ネットワーク内に、地域の課題に取り組むNPO活動を運営する修了生、卒業生などをネットワークのノードとして取り込むことが必要であり、その役割を担い支援しているのが「アクター」である。
- 10) 「アクター」とNPO運営者の紐帯が強ければ、より多くの「時間コミュニティ」がNPO運営者側に供給され、地域貢献活動につながる可能性が高いと考えられる。
- 11) 放送大学、学習センター、サークル活動、そのネットワーク（いずれも「中間的集団」である）を経由することにより、NPO活動などにエントリーしていく可能性がある。これらはインフォーマルなコミュニティで実施されているものである。
- 12) 群馬SCのサークル活動「生物研究会」は、そのネットワークを経由し、周縁にあるNPO法人、ボランティア組織、環境保護団体などを経由し、人々（学生）を地域貢献活動や社会貢献活動へと外へ押し出して行く機能がある。
- 13) 前稿の表3-5（河合他 56）は、放送大学のフォーマルではないもう一つのインフォーマルなカリキュラムである。教室から出て実践活動か、実践活動に近いところで行われる。ここでは「アクター」の教師などがつなぎ役を果たし、図6で示す「学習する人」へ「実践する場」を供給しているのである。

以上の考察を踏まえ、埼玉SCの事例研究を整理する。群馬SCの状況を図3と図5に示した。3. で埼玉SCのCSC活動を「外部との取り組みを内包化するネットワーク形成（外部との協働）」ではないかと考えた。これに対応する形で埼玉SCの状況を仮説図とし

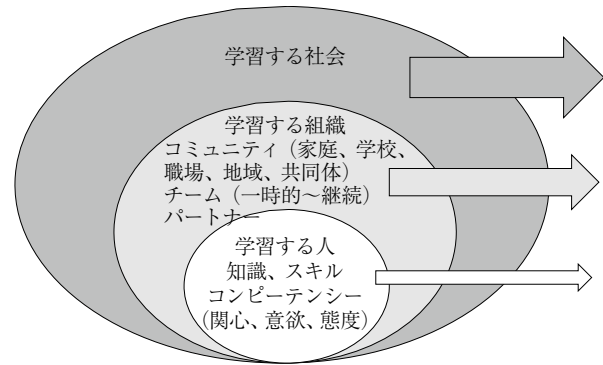


図6 生涯学習社会
出所：立田（26）

て図7に示す。

埼玉SCのCSC交流会やサークルへのインタビューから群馬SCと同様に、①でバーチャルコミュニティからリアルコミュニティへの変換があり、SCを土台としてサークル、同窓会、CSCが存在している。これらの「時間コミュニティ」が目指すのは、フェスタの運営実行である。埼玉SCにおいても②で示す外部への人々の押し出しも示されているが、③で示すように、人々を埼玉SCに呼び込む力が押し出す力より圧倒的に大きいことが特徴である。

これまで埼玉SCが蓄積し、生成した「プラットフォーム」は「外部との交流・協働」のためのプラットフォームであると考えられる。一方、群馬SC「生物研究会」が生成して来たプラットフォームは、人々を外へ押し出し、NPO法人などが提供する「時間コミュニティ」への参加の機会を提供している。その過程で行われているのは何か？それは、バーチャルコミュニティからリアルコミュニティへの転換、即ち仲間づくりからテーマやミッションを持ったサークル活動への参加、ネットワークを通じた「テーマコミュニティ」への参加である。それぞれの転換点で行われているのは、外部の人々との「交流」である。

埼玉SCのCSC活動は、人々との交流が外部との協働により埼玉SC内部へ、取り込まれるといえると考えられる。埼玉SCのサークル活動やCSC活動ではまちおこしや環境問題などの地域課題をテーマとした取り組みは見られない⁵⁴⁾。サークル活動においても文化・芸術をテーマとするものが全体の半数である⁵⁵⁾。社会貢献活動では福祉施設訪問におけるダンス披露など文化、芸術的な取り組みである。陸前高田復興支援も絵本「ハナミズキのみち」紹介をもとに形成されている。

このことから埼玉SCのサークルは外部の文化、芸術団体との関係が深くなる。このような傾向により埼玉SCのCSCを主体とした取り組みは外部の文化・芸

⁵⁴⁾ 前節で述べた埼玉SCの学生と地域の関係の薄さが要因といえる。

⁵⁵⁾ 健康体操研究会もダンスを行う事から、ダンスのサークルが3つ、朗読の会、音楽のWWM、俳句の会とインタビューを行ったサークルでも半分当たる。

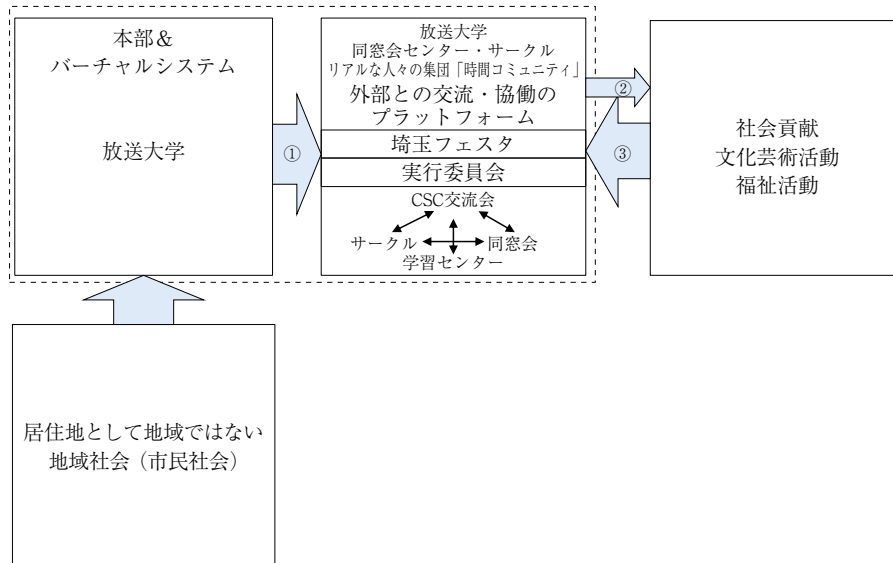


図7 埼玉SCの外部との交流プラットフォーム図
出所：吉田作成

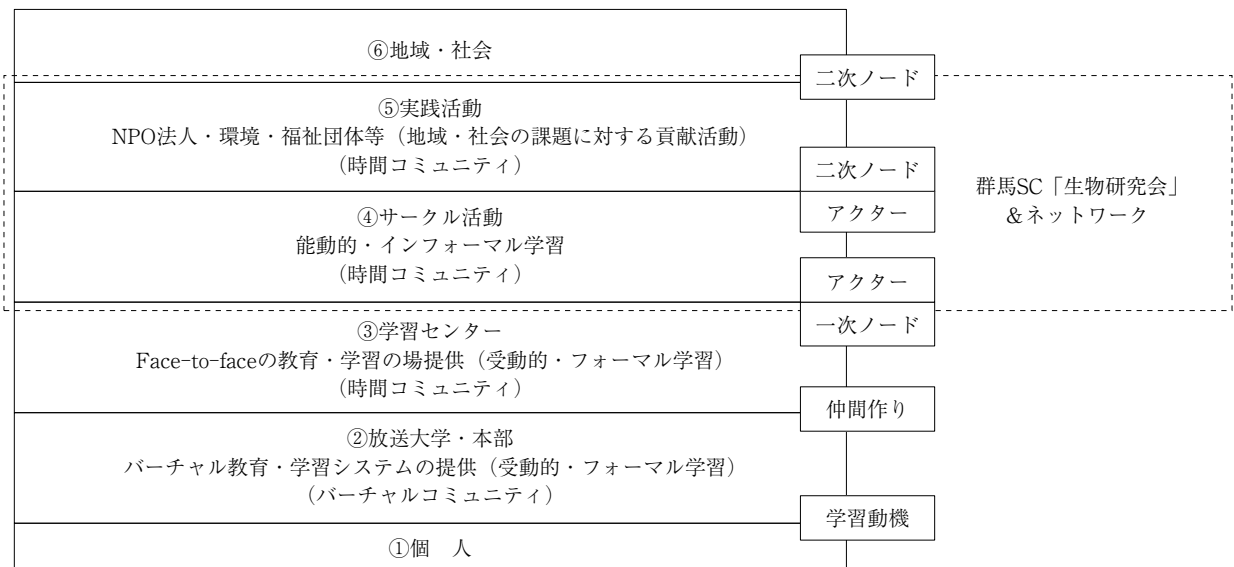


図8 群馬SC・「生物研究会」ネットワークとの類似性
出所：吉田作成

術的な活動を取り込んでいる。また取り込み内容も埼玉SCに無いものを取り入れるという傾向⁵⁶⁾がみられる。埼玉SCの交流プラットフォームは図7のようにサークルのフィードバック関係ではなく互いに主体性を持った協働関係といえる。また地域との関係は居住地としての地域ではなく、広い意味での市民社会としての地域との関係といえる。

表1、表2、図3、図5、図6、図7を包括的に図8に示す。学習動機を持った①個人から始まる階層は、最後に⑥の地域・社会に至る構造である。各階層から次の階層への「連結」の役割を果たす人や目的、

動機などを右端に入れた。群馬SCの「生物研究会」の前後のつながりは、立田(2018:26)が示した図6と非常によく似た構造を持っていることが分かる。図7の埼玉SCのCSC交流会を中心にした構造もよく似たものといえる。

群馬SCと埼玉SCの事例研究からの差異は、図8で⑤から⑥が外へ向かうか、⑥から⑤へと内へ向かうかである。図7をもとに、表1、図3及び図8について、埼玉SCに置き換えて考える。

図3では、群馬SCの「自然や環境」にかかわる活動が人々を学習センターの外に押し出して交流の場が

⁵⁶⁾ 音楽祭のジャズバンドが例となるが、むぎの会の復興支援チャリティコンサートも例といえる。

学習センター外部に形成される。埼玉SCでは、これと異なり、図7に示すように「文化芸術活動」における人々の大きな交流の場が埼玉SCで開催されるフェスタにあるため、外から内に向かう。

表1の階層6で、「文化芸術活動」においては「プロ級講師」を外から招いている。「文化芸術活動」は、群馬SCの「生物研究会」が対象とする地域固有あるいは土着の自然や環境と異なり、「都市型」あるいは「汎用的」テーマを扱っている。階層7で、サークルやCSC主催の取り組みとなる。階層8では、フェスタにおけるコンサートなどが有料となり、金銭的に事業レベルで成立する。

図8で放送大学教員やNPOオーガナイザーなどが果たした「アクター」や「二次ノード」の役割は、階層6の「プロ級講師」に置き換わるのである。

動機を持った個人がバーチャルシステムである放送大学・本部に登録し、家庭や通勤中など、どこでもTVやパソコンなどでリアルなつながりなしに学習が始まる。そして、藤生氏や「生物研究会」の松田氏のような人々が学習センターで仲間作りを始め、「生物研究会」などサークル内部の紐帯を強める働きをするのである。

黒川(2006)が言うように、学習センターという「場所」が「時間コミュニティ」になるのである。また、学習センターという土台があって初めてサークル活動が可能となるので、学習センターの存在意義は大きい。そして、サークルにアクターが取り込まれて生まれる二次ノードにNPO法人など地域社会とつながりを持つ運営者を取り込んでいくとき、地域貢献や社会貢献の実践活動の「時間コミュニティ」が立ち上がる。アクターや二次ノードが「時間コミュニティ」の連結役を果たすのである。

学習センター、サークル活動、実践活動へと3つの「時間コミュニティ」を連結し、地域貢献や社会貢献に至るこの仕組み(=プラットフォーム)では、その間に参加者が行事の選択を行っているものと推測される。この仕組みの中では、参加者個人の内発的動機付けや内発的報酬のやり取りがあるものと推測される。

一方、学習センターが④や⑤の活動を積極的に評価していく時、「生物研究会」を「学習する組織」と把握した場合に、組織の内発的動機や内発的報酬の論点が浮上すると考えられる。その意味でも学習センター

を含む本学の教育情報システムは、立田のいう知識基盤社会の到来を見すえる時、その存在意義は一層重要になる。

こうした個人や組織の内発的動機と内発的報酬がどのように生成しているかを解明することは喫緊の課題であると思われる。

引用文献

- 河合明宣・大橋正明(2017)『新訂NPOマネジメント』放送大学教育振興会
- 河合明宣・吉田瑞樹・川島英昭(2018)「放送大学の地域貢献機能—学習センター・サークルのネットワーク分析を手がかりに—」『放送大学研究年報』第36号
- 黒川紀章『都市革命』(2016)中央公論新社
- 埼玉同窓会さくら草編集委員会(2019)『埼玉同窓会会報さくら草』第59号
- 埼玉CSC交流会学生新聞編集委員会『学生新聞』創刊号(2009年3月28日)~第64号(2019年8月23日)
- 放送大学埼玉学習センター(2019)『2019年度 学習センター利用の手引き』
- センゲ、ピーター M(2011)『学習する組織』英治出版(訳者：枝廣淳子・小田理一郎・中小路佳代子)
- 立田慶裕(2018)『生涯学習の新たな動向と課題』放送大学教育振興会
- 早瀬昇・松原明(2004)『NPOがわかるQ&A』岩波ブックレット(No.618)、岩波書店
- 広井良典(2009)『コミュニティを問いなおす』ちくま新書、筑摩書房
- 藤生幹雄(2011)『放送大学修士論文要旨 地域活性化(まちおこし)について—実体験を通して見た地域の現状を、今後への展望』
- 藤生幹雄(2016)「私の放送大学 学び続けて成長」『文部科学通信』(No.402)2016・12・26
- 放送大学中国四国ブロック学習センター(2017)『放送大学に学んで—未来を拓く学びの軌跡』東信堂
- 松田君子他(2018)『生物研究会 創立十周年記念誌』放送大学サークル生物研究会(平成28年4月)
- 安田雪(1997)『ネットワーク分析』新曜社
- 放送大学ホームページ・学習センターホームページリンク
<https://www.ouj.ac.jp/hp/sisetu/center/hplink.html>
 2019年9月30日確認
- https://ouj.repo.nii.ac.jp/?action=pages_view_main&active_action=repository_view_main_item_detail&item_id=8556&item_no=1&page_id=13&block_id=17
 2019年10月30日確認

(2019年11月1日受理)